

である。

動詞

【八八】 動詞の活用わ、文語にわ、四段、上二段、上一段、下二段、下一段、カ行キョウ變格、サ行變格、ナ行變格、ラ行變格の九種があるが、口語でわ、四段が、五段となり、上二段が、上一段と一つになり、下二段が、下一段と一つになり、ナ行變格、ラ行變格が、五段となつて居るから、九種が減つて、五種となつた。

【九〇】 口語の五段活用わ、文語の四段活用と、大きな變わりわなない、唯、文語の未來の形の「書かむ」「指さむ」が、口語でわ、全國、残らず、「書こう」「指そう」「すべて、動詞の未來の形の變わつた事わ、(一一八)の處で云う」と云うようになつたから、これを活用として加えて、五段活用としたのである。

○文語のハ行四段活用の「は」「ひ」「ふ」「へ」を、口語でわ、全國、すべて「わ」「い」「う」「え」と云う、そこで、未來の形の「思おもおう」「思おもはむ」「買かおう」「買かはむ」などを加えて、「わ」「い」「う」「え」「お」をワ行として五段活用とした。

思	おもは	おもひ	おもふ	おもへ	(おもはむ)	文語ハ行四段活用
思	おもわ	おもい	おもう	おもえ	おもおう	口語ワ行五段活用

「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」「わ、古くから、わ」「ゐ」「う」「ゑ」を、又わ「い」「え」「お」と通わせて居たのわ、次のよ

思 おもは おもひ おもふ おもへ (おもはむ) 口語ハ行四段活用
おもわ おもい おもう おもえ おもおう 口語ワ行五段活用

「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」「わ、古くから、「わ」「ゐ」「う」「ゑ」を、「又わ」「い」「え」「お」と通わせて居たのわ、次のようである。(體言なのわ、擧げぬ)ハ行の音の子音わ、古くわ、唇音の「f」であつた、ワ行の音の子音の「w」も、唇音であるから、通わたたのである、それが「h」となり、又、「i」「e」「o」「い」「え」「お」となつたのわ、子音が失せて、母韻ばかりとなつたのである、ワ行の「wu」「わ、ア行の「u」となつても、やはり、唇音であることを失わぬ。
○「は」の「わ」と通つて居るのわ、

古事記、景行の卷、やまとし宇流波斯、靈異記、上、二三 姝、ウルハシ、同、

中、三三 姝、于留和シ、新撰字鏡、鬢、加美宇留和志、同、連字部、嬋媛、

美麗之兒、宇留和志、

萬葉集、二十、からまる君を、波可禮か行かむ。同、十五、世の中は、常かく

のみと、和可禮ぬる。

類聚名義抄、趙禾シル、ハシル、古今集、俳諧、人にあはむ、つきのなきに

は、思ひおきて、胸はしり火に、心焼け居り。童蒙頌韻、趨、ワシル、

新撰字鏡、聒、左和久、類聚名義抄、聒、サハク、木工權頭爲忠朝臣家百

首、つれなき戀に、さはぐ心を、悦目抄、つやく、さはぎたるけしき

【八八】 【九〇】 動詞 五段活用

もなくて、

古事記、目弼王、日本書紀、眉輪王、新撰字鏡、膝面和也、於毛與和志、

悦目抄、忠峯忠見云々、よはけれど、やさし。

新撰字鏡、燥可和久、類聚名義抄、涸、カハク、伊呂波字類抄、乾、カハ

ク、

日本紀竟宴歌(平安朝時代) 替可波留 悦目抄、くもりなきの歌、三句、さ

ながらかわらす。童蒙頌韻、渝、カワリ。

新撰字鏡、連字部、惶急、阿和豆、類聚名義抄、惶、アハツ、周章、アハツ、定

家假名遣、あはただし、周章、

新撰字鏡、割、屈曲也、太和牟、定家假名遣、たはむ、撓、

源氏物語、夕顔、たゝかくながらくはふべき事侍らざめり 悦目抄、和

歌は、我朝の風俗、云々、延喜のかぐらの歌にも、くわへられける。童蒙頌

韻、加、クワヘタリ、伊呂波字類抄、加、クワフ、

吾妻鏡、文治五年四月二十一日、あやまち候はざらん。くくにをめされ候

わんこと、

「ひ」の通つて居るのわ、

わんこと、

「ひらる」の通つて居るのわ、

新撰字鏡、蘭知比佐支井、悦目抄、ちいさきつちくれをゆづらす。

古今集雜上、思ふどち、團居まじりせる夜は、唐錦たまく惜しきものにぞあり

ける。一本神樂歌、榊、八十氏人ぞ、滿登比みんとうせりける。(今井似閑ノ萬葉緯ニ

納レシ本)

萬葉集十五、我が胸痛し、古非ふるひ戀こひの繁きに、後拾遺集戀一、我れが身は、

とかへる鷹となりにけり、年はふれども、こひこひ戀こひ木居こゑは忘れず。

類聚名義抄、用、モチキル、蜻蜒日記中、夢をも佛をも、もちいるべしや、

もちるるまじや。紫式部日記上、をりくの有さまにしたがひても

ちひんことの、いとかたかるべし。今昔物語十二、二會ノ講師ヲ用イ

ル。源仲正家集(頼政の父)千代までも、影をならべて、逢見むと、祝ふ鏡

の、もちひもちひ餅もち用もちざらめや。發心集一、いと、もちいる事なし。定家假名

遣、もちひて、用、もちいらる、被用、もちるる、用、

其外、「まひまひ舞まひを、童蒙頌韻に、「娃、マイヒメ、「あげつらひあげつらひ論あげつらひを、同書に、「論、アゲツ

ライ、「まゐるまゐる參まゐるを、悦目抄に、「貴所へまいらする歌、梁塵秘抄二、授記品に、「多

【九〇】 動詞 五段活用

くの佛にまいりあひて同書、藥王品に「くらゐを菩薩のくらいえたりける」
 定家假名遣に「いを、おひうど、老人、おひぬれば、老はひすみ、掃墨、くひて、悔、お
 ひて、於、とひて、解、いさぎよひ、潔、むくひ、報、ひを、おいて、負、しゐて、強、とりか
 い、鳥飼、さいはい、幸、もちい、もちゐ、餅、ゐを、定家假名遣に「いさる、膝行、字鏡
 集に、噓、フルキイドロ、」

「ふ」を「う」としたのわ、

靈異記の序の訓注に「償、ツクノウ、傷、ソコナウ、嗤、ワラウコト、」永久四年百
 首、秋の部に、物名の草香（和名類聚抄、草類、芸、和名、久佐乃香）の題で、源俊賴「い
 くさくさ、の。か。う。心。や、つきぬらむ、今のはりみち、石ふますとて」（往來に見て、
 新路（はりみち）の石を踏ませる爲に、馬を野飼にする心がついたのであるうかの意
 味である、）悦目抄に「歌に、善悪あり、云々、こしおれたるものは、はうく（這
 々）もありぬべし」。源平盛衰記、三十五に「信濃なる、木曾の御料に、汁かけて、
 たゞ一口に、くらう（食、九郎判官）。定家假名遣に「すまう、相撲、ころもふるう、
 衣振、まじなひたまう、呪給、なやらう、追儼、假名論語、季氏篇に「すくないこ
 とをうれへずして、ひとしからざるをうれう」（不患寡、而患不均、）

其外、童蒙頌韻に「通、カヨウ、違、タガウ、謠、ウタウ、伊呂波字類抄に「養、ヤシ

とをうれへずして、ひとしからざるをうれう。(不患寡、而患不均)

其外、童蒙頌韻に、「通、カヨウ」「違、タガウ」「謠、ウタウ」、伊呂波字類抄に、「養、ヤシ
ナウ」「病、ヤマウ」、字鏡集に、「没、タマヨウ」、平他字類抄に、「祝、イハウ」「拂、ハラ
ウ」「倭玉篇甲」「惱、ワヅラウ」

「う」を、「ふ」としたのわ、

類聚名義抄に、「樹、ウフ」、多武峯少將物語に、「くわくこう(郭公)を、山路しる、鳥
を我身に、なしてしが、君かくこふ(戀)となきてつぐべき。「まうけ(設)を、悦目
抄に、「歌を、かならず、上の句をよまむとおもふべからず、云々、詞にてもまふ
けたらむ物を、あてゝみんに、

「へ」「え」「ゑ」を通わしたのわ、

靈異記、上に、「たえ(絶)を、ドミノオガハノタへバコソ、「する(居)を、悦目抄に、「歌
は、人によりて、云々、此縁を、むね、こし、すそにすへたるを、よき歌とす。「おぼ
え(覺)を、同書に、「俊頼朝臣、云々、一首詠せまほしくおぼへしに、「まへ(舞)を、梁
塵秘抄、二、雜に、「まゑく、かたつぶり、「たへ(妙)を、同書、二、極樂歌に、「たえなる
のりをぞとなふなる」定家假名遣に、「へ」を、「あしなえ、塞」「さえのかみ、さいの
かみ、さゑのかみ、道祖神(支の神)「こしらゑて、誘、「え」を、「あまへて、甘」「さかへゆ

【九〇】 動詞 五段活用

く、榮行「いへぐすり、愈藥」、「る」を「うへおく、植置」「すへて、居」「うへたり、飢」、
「ほ」を「を」おとしたのわ、

類聚名義抄に、「沃、ウ、ルヲス」「懸、ハ、ルカナリ、トヲシ」「檄、モトヲル」、悦目抄に、「歌
よまん時、云々、後に、よくなをし、よみとゝのふべきなり」「長歌とは、云々、終の
七々にいたるまで、いひとをせる物なり」。定家假名遣に、「きおふ、競」「くづを
る、頽」「とおる、通」、

「を」を「お」ほとしたのわ、

類聚名義抄に、「嬋媛、タオヤカナリ」、悦目抄に、「又、縁の字、云々、此三のこしお
れ(腰折)にまよひて、歌は、更にいでこぬ成べし。」「かなをいたはる、云々、句の末
には、發句、後句のおはりのかななり。」「朝倉や、木の丸殿に、我おれば、「心操もお
さまり、才幹もありて、」定家假名遣に、「花をおる、折、「いとおし、最惜、」類聚名
義抄、禾部に、「馥、カホル」、

「お」を「を」としたのわ、

靈異記、中、十三に、「陷、ヲチイル」、同、中、三十三に、「晚、ヲソク」、悦目抄に、「萬葉集
に、云々、人のかたちすぐれたる中に、心をくれたる所みゆれども、」定家假

名遣に、「を」を「遅」を「す、推」をとづれ、音信、

靈異記中十三に「隋三才圖會」同中三十三に「時」
に、云々、人のかたちすぐれたる中に、心をくれたる所みゆれども、一定家假

名遣に、「を」をそし、遅、「を」をす、推、「を」をとづれ、音信、

鎌倉時代以後の書物にわ、其混雜が甚しい、今の口語でわ、ハ行活用の動詞の語尾わ、「は」を「わ」に、「ひ」「ふ」「へ」を、「い」「う」「え」に發音し、「言はむ」「買はむ」「わ」「言わむ」「買わむ」となり、又、「言わう」「買わう」となり、今わ、「言おう」「買おう」と發音する。

○文語のナ行變格活用の「死ぬ」「往ぬ」を、今わ、全國で、大抵、通例の四段活用に變えて、つかつて居る、そこえ、未來の形の「死のう」「往のう」を加えて、五段活用とした。

死	しな	しに	しぬ	しぬる	しぬれ	(しなむ)	文語ナ行變格活用
	しな	しに	しぬ	しぬ	しぬ	しぬ	口語ナ行五段活用

中國、四國、九州の處々にわ、「死ぬる人」「往ぬる時」など、まだ、ナ行變格活用の姿を残して、云つて居る所がないでわない、しかし、それも、多くわ、連體形の場合ばかりで、「死ぬれば」「往ぬれば」など、云うことわ少くて、大抵わ、「死ぬば」「往ぬば」と云うようである。

「往ぬ」と云う動詞わ、三重縣、愛知縣、岐阜縣、福井縣から東でわ、口語につかわない、九州でも、佐賀縣、熊本縣、鹿兒島縣などでわ、用いぬようである。

文語にわ、此外に、命令形にばかり用いる「死ぬ」と云う活用があり、將然形が「死なば」「已然形が「死ぬれば」であるのに、口語にわ、「死ぬ」を命令に用いて、又「死ぬば」と、將然にも、已然にも用いることゝなつた、又、文語の四段、上一段、下一段活用、の外の動詞わ、口語では、終止形が亡びて、連體形が終止形を兼ねるようになつたのに、後の「一〇九」を見よ、此ナ行變格活用わ、却つて、連體形の「死ぬる」が亡びて終止形の「死ぬ」が連體形を兼ねるようになつた、是れわ、元から活用が、四段活用に似て居るから、四段活用の方え、引き込まれたのであらう、既に、室町時代の狂言記の吃に、「それならば、往ぬやうに、云て遣らう、同、鎌腹に、「此鎌を下に置いて、飛びかゝつて死ぬに、死なれぬといふ事はあるまい」鎌腹を切つて死ぬぞ」などと、終止形を、連體形に用いて居る。

○文語のラ行變格活用の「あり」「居り」の終止形を、口語でわ、全國、残らず、「ある」「居る」と云つて居る、そこで、未來の形の「あろう」「居ろう」を加へて、五段活用とした。

有	あら	あり	ある	あれ	あろう	口語ラ行五段活用
	あら	あり	ある	あれ	あろう	文語ラ行變格活用

室町時代の幸若の入鹿に、「諸卿残らず參内ある、鎌足、憚り御不參なり。」史記

抄、十、五三に、「車馬ヤ、女ヤ、ナンドガアルト云モ、此心ゾ。」閑吟集に、「我おもひ、うち

室町時代の幸若の入鹿に、諸卿残らず參内ある、鎌足、憚り御不參なり。」史記

抄十、五三に、「車馬ヤ、女ヤ、ナンドガアルト云モ、此心ゾ。」閑吟集に、「我おもひ、うちにある、色や外に見えつ覽。」運歩色葉集(甲)に「居、ヲル、」節用集(甲)に「居、ヲル、」狂言記、宗論に、「其方に、ちと意見をしたい事がある。」江戸時代の東海道名所記、舞坂に、「誠に、世の中に、鬼はないものぢやと、樂阿彌も、かんしんしておる、されば、云々」など、ある。

○文語の上二段活用の「恨む」も、口語にわ、全國、大抵、五段活用に變わつて居る。

恨

うらみ	うらみ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ
うらみ	うらみ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ
うらみ	うらみ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ
うらみ	うらみ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ
うらみ	うらみ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ	うらむ

文語マ行上二段活用

口語マ行五段活用

しかし、中國、九州邊に、まだ、口語に、少しわ、上二段活用につかつて居る所があり、又、上一段活用に云つて居る所もあり、又、またせてつかつて居る所もある。

【九一】 文語の上二段活用の「起く」「起くる」「起くれ」「落つ」「落つる」「落つれ」を、口語でわ、全國、大抵、「起く」「落つ」の終止形をつかわないで、「起きる」「起きれ」「落ちる」「落ちれ」と、上一段活用に云う、但し、九州の處々にわ、まだ、「起くる」「起くれ」「落つる」「落つれ」

(終止形の「起く」「落つ」「わ、亡びて居る」と云う所がある、けれども、今わ、上一段活用と定めた。

起

おき おき おく おくる おくれ (おき、む)

文語カ行上二段活用

おき おき おきる おきる おきれ おきよう

口語カ行上一段活用

口語にも、稀に、「過ぐる」三月三日、「など云ふことわある。

「おくる」「おくれ」「おつる」「おつれ」と云うわ、九州の宮崎縣に、最も多い、和歌山縣の日高郡でも、そう云う。

未來形の「おきよう」「わ、次の下一段活用、カ行變格、サ行變格、の未來形と共に全國の處々に、異同がある、それわ、後の未來形の條(一一八)に云う。

山形縣の山形市、北村山郡、岩手縣などでわ、「落つる」「落つれ」「報ゆる」「報ゆれ」をませて云い、山形縣の最上郡、大坂府の東成郡でわ、「起きる」「起くれ」「落ちる」「落つれ」など云い、肥前の小城、多久、の二郡でわ、「起くる」「起きれ」「落つる」「落ちれ」と云う。

○文語の四段活用の「飽く」「足る」「借る」を、關西の口語にわ、おもに、五段活用につ

云う。

○文語の四段活用の「飽く」「足る」「借る」を、關西の口語にわ、おもに、五段活用につ
かい、關東では「飽きる」「足りる」「借りる」と上一段につかつて居る、因つて、是等の
語わ、兩方に活用するものとする。

關東でも「勘定合つて錢足らず」「月足らず」などといふ云う。

關西で、「かつて(借)來る」「平家物語」十、だいら女ばうの事、「人に、くるまかつて、つ
かはされにけり」、「かうて(買)來る」と云うのが、關東で、「かりて(借)來る」「かつて(買)
來る」と云うのと、紛れておかしいと云うが、東西で、活用が違うのである。

室町時代の運歩色葉集(甲)に、「借、カリル」、江戸時代の醒睡笑、四に、「大名の前にて、
座頭の、ひたもの、ねぶるを見給ひ、云々、昔より、春は、蛙が目をかりる」と申し傳
へて候、云々、我等のやうなるあしき目をもかり候は、よくく、蛙のよりあひ
に、目のはやる仔細御座候や、と申しける。「諸國盆踊唱歌、因幡に、ごせとちぎ
りて、いま、たあきる、釘をうちたや、のちのつま。」など、關西にも、上一段活用
が見える。

○文語のハ行上二段活用の「強ひ」「強ふ」「強ふる」「強ふれ」の類、又、ヤ行上二段活用
の「報い」「報ゆ」「報ゆる」「報ゆれ」の類、ソ行上一段活用の「用ゐる」「用ゐる」「用ゐれ」の類を、

口語でわ「強い」「強いる」「強いれ」「報い」「報いる」「報いれ」「用い」「用いる」「用いれ」など、云うから、ア行上一段活用とする、但し、九州にわ「強い」「強ゆる」「強ゆれ」「報い」「報ゆる」「報ゆれ」など、つかつて居る所もある。

○「報ゆ」は、ヤ行上二段活用であるが、早くから、ハ行四段活用にも用いられて居た、鎌倉時代の平家物語、二、小松教訓の事に、「いく程もなくて、はや、身の上にもむくはれにき、と思へば、云々、同、七、福原おちの事に、「何ぞ、今、其はうをんをむくはざらんや、云々、あやしの鳥けだものも、をんをほうじ、とくをむくふ心は候也。」古今著聞集、二に、「日食（にちじま）すこしきにして、うへしのびがたきは、餓鬼のかなしみをむくふなり。」同、二に、「自業自得果の衆生の業をむくはんが爲に、みな、我所にきたる。」同、九に、「今夜のうちに、此恨をばむくはんするものを、と思ひるたりけり。」同、十二に、「年來の罪をも報はんが爲に、頭をのべて参候。」室町時代の謡曲、葵の上に、「我、人の爲、つらければ、必ず身にもむくふなり。」運歩色葉集（甲）に、「報、ムクウ、節用集（乙）に、「酬、ムクウ、江戸時代の倭玉篇（丙）に、「酬、ムクフ、寛文五年の山鹿語録、十七、父子道、二、事父母、報讎に、「父の仇を報はん、と思ひ入るゝときは、合類節用集に、「報、ムクフ、寶永三年の近松門左衛門の碁盤太平記、泉岳寺の條に、「主人の仇を報はん爲、など、見える、罪が報つて來る、などとも云い、

ときは、「合類節用集」に「報、ムクフ」、「寶永三年の近松門左衛門の碁盤太平記、泉岳寺の條に、「主人の仇を報はん爲、など、見える、「罪が報つて來る」などとも云い、且、自動、他動、の變わりもあるようである、しかし、今でも、まだ、全く、わ變わり切つて居らぬように思われる。

○古事記、神代の卷に、「啼伊佐知伎」とあつて、それについて、「何由以汝不治所事依之國而哭伊佐知流」とあり、「日本書紀」にわ、「哭泣恚恨」とあり、「欽明の卷」に、「大息涕泣」とある、倭玉篇(甲)に、「泣、イサツ、ナク」と此「伊佐知」と云う動詞わ、上二段活用のように思われるが、右の「伊佐知流」を、「いさちる」と讀めば、上一段活用となつて、本居宣長の古事記傳にも、いつてある通り疑問のものである。

○古事記の景行の卷に、「荒夫琉神、常陸風土記に、「荒賊、俗曰阿良夫流爾斯母乃、」などとあるに、「續日本紀、延暦八年九月戊午の詔に、「陸奥國、荒備流蝦夷」とあつて、此「荒備流」を、「あらびる」と讀めば、上一段活用のようである、しかし、古事記に、「訓建、云多祁夫」とあり、萬葉集の十に、「秋風に、山跡部越雁が音は、」(同卷に、「秋風に、山飛越、雁が音の、」ともある、)とあつて、舊訓に、「部」に、「ビ」としてある、「夫」に、「ブ」「ビ」の音があり、「部」に、「ブ」「ビ」の音があるのを見れば、「備」も、「ブ」の音に用いたのかも知れぬ。

同じ字を同時に、いろ／＼の音に用いたのわ、中宮寺の所藏の天壽國曼陀羅の繡張文に、「加斯支移比彌乃彌己等」(炊屋姫命)の「彌」の字など、其例である、次に云う下二段活用の論の處(九二)の「於也波左久禮騰、和波左可禮賀倍」なども、同じである。(尙、其處で云う)。

○萬葉集、十に、「君に戀ひ、裏觸居れば、敷の野の、秋萩凌ぎ、左牡鹿鳴くも」とあるに、古今集、秋、上に、「秋萩に、うらびれをれば、足引の、山下とよみ、鹿の鳴くらん」。新葉集、戀、四に、「色かはる、小萩がもとに、うらびれて、いつしかのねに、鳴くと知らせん」とある、此「うらぶれ」「うらびれ」共に、ラ行下二段活用の連用形と見れば、仔細わなないが、「うらぶる」と云う語わ、「心侘ル」の約まつたものと云う説があるを見ると、何か、其間に、變わり目があるようである、其外、「老ゆらく」であるべきが、「老いらく」となつて居るのも、上二段の、上一段に變わつたものであろうか。

○上二段活用の、上一段に變わつたもの、元祿以前の書物に見えるわ、誠に少ない、上二段活用の動詞の、數の少ないからでもあろう、今、諸書から拾つたものを、次に示す。

ものを次に示す。

平安朝時代

類聚名義抄、関トヂル、

伊呂波字類抄、媚コビル、

鎌倉時代

山家集、いせ島や、月のひかりの、さびる浦は、明石には似ぬ、影ぞすみける。

春秋左氏傳集解(圖書寮藏、文治建久から弘安前後までの寫本)、荀瑩曰、城

小而固、云々、隕^ヲ于^ニ深淵。

論語(山城高山寺藏、寛元元年寫)、暴虎憑河、而無悔者、吾不與也。

字鏡集、墮ヲチル、(此頃の書物に、陥を「ヲチル」と讀んであるのわ、オチイル

の約まつたのである)、毫ヲイル、

室町時代

倭玉篇(甲) 懼ヲヂル、

運歩色葉集(甲) 恥ハヂル、 澁サビル(万ニ)

節用集(乙) 愧ハヂル、

狂言記、つんぼ座頭、扱もく、つんぼに物いへば、精も心も、つきることじ

【九一】 動詞 上一段活用

や。

節用集(丙) 強シイル、

江戸時代

節用集(戊) 強シヒル、

倭玉篇(乙) 佩、ヲビル、 免、トヂル、 邁、スギル、 朽、ヲイル、 生、イキル、 凸、

ヲキル、 育、イキル、

雑兵物語下、夫丸、 胴腹の疵から、血がはしる、又、血が胴へ落ちるもんだぞ。

合類節用集、 緘、トヂル、 禿、チビル、 闌、アラビル、 浴、アビル、

○上一段活用の動詞の「射る」「鑄る」「着る」「似る」「見る」などわ、全国について、元の活用でつかつて居る所が多いが、又、稀に、五段活用に變えて居る所もある、けれども、又「射る」「鑄る」「わ、變えて、着る」「見る」などわ、元のまゝで居る、など、語に因つて、まち／＼である、且、變えて居るのにも、連用形にわ、「射殺す」「鑄直す」「着飾る」「見放す」「射て」「着て」「見て」など云つて、元のまゝでつかつて居るのも多い、全く元のまゝに用いて居るのわ、東國である、(京都、大坂も、元のまゝ)今わ、元のまゝに、上一段活用と定めた。

【九二】 文語の下二段活用わ「受く」「受くる」「受くれ」「捨つ」「捨つる」「捨つれ」てあるが、

のまゝに、上一段活用と定めた。

【九二】 文語の下二段活用わ「受く」「受くる」「受くれ」「捨つ」「捨つる」「捨つれ」てあるが、口語にわ、全国、大抵「受く」「捨つ」の終止形わなくなつて、「受ける」「受けれ」「捨てる」「捨てれ」と、下一段活用になつて居る、但し、九州の處々にわ、今でも「受くる」「受くれ」「捨つる」「捨つれ」と云う所がある、けれども、今わ、下一段活用ときめた。

受

うけ	うけ	うけ	うけ	うけ	うけ
うけ	うけ	うける	うける	うけれ	うけよう

文語カ行下二段活用

口語カ行下一段活用

口語にも、稀にわ、明くる朝「明くる日」「明くる年」など云う事わある。

和歌山縣の日高郡でわ、「受くる」「受くれ」「捨つる」「捨つれ」と云い、又、九州でも、福岡市、小倉市、肥前の唐津町、大分縣の一部、宮崎縣の延岡町、沖繩縣でわ、「受ける」「受けれ」「捨てる」「捨てれ」と云う。

和泉の堺、攝津の東成郡でわ、「受ける」「受くれ」「捨てる」「捨つれ」と云う。

○文語のハ行下二段活用の「教へ」「教ふ」「教ふる」「教ふれ」の類、又、ヤ行下二段活用の「覚え」「覺ゆ」「覺ゆる」「覺ゆれ」の類、ワ行下二段活用の「植る」「植う」「植うる」「植うれ」の

類を、口語でわ「教え」「教える」「教えれ」「覚え」「覚える」「覚えれ」「植え」「植える」「植えれ」と云うから、共に、ア行下一段活用とする、但し、九州にわ「教え」「教ゆる」「教ゆれ」「覚え」「覺ゆる」「覺ゆれ」「植え」「植ゆる」「植ゆれ」とつかつて居る所もある。

○古事記、允恭の卷の歌に、「那加佐陀賣流淤母比豆摩阿波禮」とあるを、解しにくい語としてあるが、「汝が定める念妻柯恰」と解いた説に従えば、此「定める」わ、下一段活用に變つたものゝようであるが、容易にきめることわ出來ぬ、橘守部の稜威言別にわ、「佐陀賣多流」と、多の字を加えて、其左に、丸星が附けてある、何か、そう云う異本でもあつたものか、又わ、自分に加えたものであろうか、此言葉わ、まず、不審として置く。

○新撰字鏡に、「鱒魚乃曾己禰太々禮留」(損ね爛る、但し、天治寫本の十二卷本にわ無い)とあるを、「たゞれる」と讀めば、下一段活用のようであるが、萬葉集、十に、「爲暮零禮見」とあり、同書、十四に、「於也波佐久禮騰、和波左可禮賀倍」(親は放くれど、我は放かるかへ)で、舊訓に、「可禮」に、「カル」とある)とあつて、同卷に、「我波佐可流我倍」ともあれば、「禮をル」の音にもつかつたものと見えるから、「太々禮留」も、「たゞる」と讀むべきであらうと思われる。

○新古今集、十八、雜下、菅公の海の歌に、「海ならず、たゞへる水の底までも、清き

「たゝる」と讀むべきであらうと思われる。

○新古今集十八、雜下、菅公の海の歌に、「海ならずたゝへる水の底までも清き心は、月ぞ照さむ」の「たゝへる」わ、下一段活用になつたものかと思えるけれども、萬葉集の十三に、「望月の多田波しけむと、吾が思ふ」とあり、夫木集二十四に、「きよみ川、いづる湊に、潮満てば、せかれてたゝふ、浦の入海」。山家集下に、「世の中に、すまぬもよしや、秋の月、濁れる水の、たゝふさかりに」。などゝあるから、此「湛ふ」わ、四段活用の自動詞で、それが「たゝへり」となるを「たゝへる」と用いたのである、又、古今集十九の旋頭歌に、「君がさす、三笠の山の、もみぢ葉の色、神無月、しぐれの雨の、そめるなりけり」とあるも、雨が葉を染める意味と解せば、下一段活用に用いたようであるけれども、雨が葉に染まつた意味とすれば、仔細わなない。

○下二段活用の、下一段活用に變つたものわ、

平安朝時代

類聚名義抄、滄、フナエカヘル、フネノエ、渝、カヘル、更、カヘル、

和名類聚抄、毛群部、獸體、鼻、宇世流、以鼻動物也、豕などが鼻で地を掘り起

す

新猿樂記、稻荷山、阿小町之愛法ウヒテカハラハ破前喜ヒラフ（破前わ、陰莖）

童蒙頌韻、甌ウセル、元龜字叢、甌ウセル、倭玉篇、甌ウセル）

類聚名義抄、躡クエル、梁塵祕抄、二、雜、むまのこや、うしのこに、くるさせて
ん。

落久保物語、二、只今の太政大臣の尻はけるウツとも、此殿の牛かひに、手ふれ
てんや。（躡ウツうるウツのウツくるウツとなつて、又ウツけるウツと約まつたものである。）

榮花物語、根合、花のさかりには、人々まゐりて、鞠ウツけなど、あそばせ給ひし
所なり。

木工權頭爲忠朝臣家百首神祭、山がつの、かきねにいウツはふ、やかつかみ、卵
の花さける、をかウツにみえるかと。

雅亮装束抄、一、だいきやう大饗のこと、ま間は、ひろくて、せんじやう軟障
は、せばくば、ちがへるウツこと、かなはじ、はな鼻つきにもすべし。

和歌初學抄、糸、へるウツ（綜）

伊呂波字類抄、經、へるウツ、渝、カへるウツ、躡クエル、總、フサ子ウツル、
古今集顯昭注、十八、者ノ字ヲ不ニヨミタガへるウツコトモアルベシ。

梁塵祕抄、二、二句神哥、このとウツのウツに、よきふでづかの、あるものを、てこウツの

伊呂波字類抄 終へル 滄カヘル 躑クエル 總フサ子ル
古今集顯昭注、十八、者ノ字ヲ不ニヨミタガヘルコトモアルベシ。

梁塵祕抄、二、二句神哥、このとのに、よきふでづかの、あるものを、てこゝの
とみを、かきよせる、ふでのちくの、あるものを。

鎌倉時代

萬代和歌集、十五、老がよの、ふけるは月に、ながめせし、人めもしらず、涙落
ちけり。

建仁三年、仙洞五十首、花といへば、なをみ山木の、梢まで、風をへだてる、心
なりけり。

無名抄、歌は、秀句を思ひえたれど、本末、いひかなへるが、よきなり。

瑩玉集、その歌のすがたに隨て、こと葉つゝきも、おなじさまに、よみかな
へるが、よきなり。

發心集、一、朝ニサカヘル家、夕ニヲトロヒヌ。

金槐集、ふりにける、あけの玉垣、神さびて、やぶれるみすに、秋風ぞ吹く。

(「やれたる」とある本も、あると云う)

教訓抄、七、舞譜名目、クエルアシ蹴足、左右アリ。

字鏡集、滄カヘル、渥ツユノタレル、

【九二】 動詞 下一段活用

古今著聞集十六、此御寺のほとりにて、すすろに、人からめる事、むかしよ
りなし。

南北朝時代

平他字類抄、經、へル、

室町時代

義經記、八、なをえ津にて、おひさがされし事、そこもしらぬ、琵琶のこゑ
かすみのひまにまぎれる、とうたひしも、今こそ思ひしられけれ。同、八、
ひでひらが子共、判官にむほんの事、九良、ふしぎの者かな、おなじ兄弟
といひながら、よりともを、度々おもひかへるこそ、ふしぎなれ。

曾我物語、九、きやうだい、屋かたをかへし事、ねすみ、ふかくあなをほりて、
くんきんのがいをはがれ、とり、たかくとんで、さうめいのがいとほざ
け、るとは、かやうの事なり。同、九、十、ばんぎりの事、大將にかはりてつ
かへるものは、かならず、其ぢんをやぶるとは、もんせんのことばなるを
や。

平家物語、劍の卷、泣々、尾張國へ歸り給ひけり、尊に仕へる人々、別を悲み

奉りて、云々。

や。

平家物語、劍の卷、泣々、尾張國へ歸り給ひけり、尊に仕へる人々、別を悲み

奉りて、云々。

撮壤集、寒熱、ホトケル、繕、ヘル、

孟子抄、三、義ト道トヲ以助クレバ、五藏ニ充滿シテ有程ニ、物ヲ食シテ飢

エル事ハ無ゾ。同、九、率土ハ、土地ノ有限リト云ハン用ゾ、土ヲシタガ

エル限リノ心ゾ。

中書王物語、物さびしげなる中に、びわひくばちのをとぞきこえる。

詠三百首狂歌、薄、招きよせて、ばかさんとてや、秋の野に、あれる狐の、尾花

なるらん。

山城太秦の牛祭祭文、やさ馬に鈴をつけて、おどるもあり、はねるもあり。

倭玉篇(甲) 耐、タヘル、

運歩色葉集(甲) 經、ヘル、綜、ヘル、掠、カスメル、延、ハヘル、構、カマヘル、

重、カサ子ル、漬、ツケル、搦、カラメル、替、カヘル、染、ソメル、存、ナガ

ラヘル、枉、マゲル、詰、ツメル、障、サヘル、飢、ウエル、餓、スエル、茹、

ユデル、

運歩色葉集(乙) 織、ヘル、憔悴、カジケル、絡、カラメル、飢、カツエル、

【九二】 動詞 下一段活用

節用集(甲) 換カエル、蹴ケル、

節用集(乙) 蹴ケル、刷ハダケル、吠ホヘル、經ヘル、悦トボケル、洩

ソロヘル、

元龜字叢、植ウエル、淬ニラゲル、蹴ケル、

狂言記、こんくわい、此山のあなたに、獵師の候、我等の一門を、つりたいら

げる事にて候。同、拔殻、酒、云々、ま一度もどつて、たべるやうにいたそ。

門の番なりとも、さして下されませう、云々、抱へる事はならぬぞ。同、宗

論、我宗體を譽めるではござらぬが、同、吟聲、其時に、御内の者がで

るであらう。同、附子、某の真直に申上げる、

節用集(丙) 歸カエル、

天正日記、天正十八年、六月十二日、新右衛門、十兵衛、まめのもち、くれる、十

四日、はれる。

節用集(丁) 經ヘル、

江戸時代

節用集(戊) 經ヘル、蹴ケル、

倭玉篇(乙) 填ウメル、任タヘル、促セメル、肝メミハダケル、和ソヘ、

疑セタゲル、弱カラメル、鄭ナゲル、掌サ、エル、驚アシナヘ

節用集(戊) 經、へル、蹴、ケル、

倭玉篇(乙) 填、ウメル、任、タヘル、促、セメル、肝、メミハダケル、和ソへ、
 ル、擬、セタゲル、搦、カラメル、擲、ナゲル、撐、サ、エル、斃、アシナへ
 ル、踢、ケル、跨、コエル、効、カンガヘル、勅、ツゲル、寤、サメル、忍、コ
 ラエル、調、ソロエル、誘、コシラヘル、章、アワテル、餒、ウエル、隨、マ
 カセル、逼、セメル、瘦、ヤセル、茹、エテル、縝、ウヘル、糲、クダケル、
 鎔、トケル、渝、カヘル、消、キエル、冽、サエル、明、アケル、礙、サエル、
 罽、サケル、負、マケル、耐、タエル、受、ウケル、晝、ワケル、丸、マルメル、
 醒睡笑、一、唯、もていて捨よとのべる、をかしや。

犬子集、十四、草臥てねる、土佐の山陰。

可笑記、三、女房をむかへるか、又姫をとるに、分別あるべし。

油糟、雜、詔へる、あたひたかばる、石ぼとけ。同、雜、勝手の床に、かける字

治川。

吾吟我集、七、強きかたに、助言いひぬる、將棊こそ、かける馬にも、むちとし
 らるれ。

正章千句、七、祝言の座に、出るやはどかる。

【九二】 動詞 下一段活用

倭玉篇(丙) 祇、マ子ル、 騰、ツタエル、 逼、セメル、 洩、ツケル、 亭、アレル、

四天王武者修行、六段目、 いざ、うつたて、もの共とて、みな、一どうにぞ、おつ

かける。

諸國盆踊唱歌、河内、 おやがかたおや、御ざらぬゆるに、人もあなづり、身も

やせる。 同、陸奥、 秋風が、吹けばく、まめのはも、かれる。 同、越中、 よ

ろづ世をへる、音なしの、たきのながれは、よもつきじ。 同、紀伊、 山がや

けるが、たふぬかきじよ、これがたふりよか、子をおいて。 同、紀伊、 いく

千代久し、松がえの、きみはさかへる、わかみどり。 同、肥前、 させばおさ

へる、おさへばのめず、のめば其身の、あだとなる。

合類節用集、 涸陰、キテル、 穎、イセル、(縫衣所謂) 馳、ハセル、 注、ハゲル、(屬

弓拏於_レ弦) 驛、ハネル、 若弱、ニヤケル、 綜、ヘル、 經、ヘル、 取換、トリカ

エル、 嬌、トロケル、 壓扁、ヲシヒラメル、 歸着、カツケル、 閨、カブセル、

點、タテル、(茶) 立、タテル、 投、ナゲル、 搏、マロメル、 拌、マゼル、 很、フ

テル、 濛、コ子ル、 遽、アハテル、 充、アテル、 墾、メゲル、ヒシゲル、 含羞、

シラケル、 白、シラゲル、 拗強、ス子ル、 挿、スゲル、(矢) 助、スケル

○上二段活用、下二段活用の、上一段、下一段と變わつたは、右の通りである、し

テル、濛コ子ル、遠アテル、充アテル、墾シケル、シケル、合テル、シラケル、白、シラゲル、拗強、ス子ル、挿、スゲル、矢、助、スケル

○上二段活用、下二段活用の、上一段、下一段と變わつたは、右の通りである、し
かしながら、江戸時代から前の書物にわ、やはり、多くわ、落つる、盡くる、受くる、
立つるであつて、右わ、多くの書物の中に、稀に見えたのを拾つたのである、江
戸時代になつてもまざつて居る、全く、上一段、下一段となつたのわ、元祿頃の
事かと思われる。

○カ行下一段活用の「蹶る」と云う動詞わ、今、全國で、元のま、につかつて居る
所が多いが、又、ラ行五段活用に變えてつかつて居る所も少くない、(京都、大坂
も、五段活用である)因つて、此動詞わ、カ行下一段と、ラ行五段との、二つの活用
のあるものと立、て、置、く。

【九三】 文語のカ行變格活用の「こ」き「く」くる「くれ」を、今、全國で、残らず、「く」の終止
形を用いないで、「こ」き「くる」くれ」と云つて居る。

來	こ	き	く	くる	くれ	(こ、む)	文語カ行變格活用
	こ	き	くる	くる	くれ	こよう	口語カ行變格活用

【九四】 【九五】 文語のサ行變格活用の「せ」し「す」する「すれ」を、口語でわ、終止形の
「す」をつかわず、「せ」し「する」すれ」と云うこと、全國、皆、同じである。

爲

せ	し	す	する	すれ	(せ、む)	文語サ行變格活用
せ	し	する	する	すれ	しよう	口語サ行變格活用

室町時代の狂言記、相合袴に、「盃、云々、まづまるらいで、左兵衛殿へ進せ_る。」
 「やい、冠者、いづれもへ、つらりと進せ_{たか}。」
 「なか、進せ_{ました}。」
 などとも、用いてある。

【九六】 漢語を、サ行變格に活用させるに付てわ、規則を立てかねるものが多
 い、一字の漢語も、すべて、サ行變格に活用させるのを、通則とするが、また、本書
 に挙げたように、いろくゝに活用させる事もある、それを、總體に分けて見れ
 ば、次のようになる。

○第一類 サ行變格に活用させるもの、

せ	らぬ	れる	し	する	すれ	しよう	しろ
し	ならぬ	いれる	さら	せ	よ		

「せられる」「しられる」「が、される」ともなり、「しさせる」「が、させる」ともなる。(委)

しくわ、助動詞の(一八六)(一八八)で云う。

「せられる」「しられる」「が」「される」ともなり、「しさせる」「が」「させる」ともなる。(委)

しくわ、助動詞の(一八六)(一八八)で云う。

「拜見」「勉強」「心配」「介抱」などの熟語の漢語わ、すべて、此活用になる。

一字の漢語の「製」「聘」「稱」「勞」「存」「壓」「決」「屬」「激」「敵」など、あらゆるものも、皆、此活用に這入る、但し、「詠」「命」「講」「報」「參」「關」「散」「禁」「信」「變」「論」「發」「察」「達」などわ、「される」「させる」「にわ續かず、(重んずる、輕んずる、なども)又、「坐」「記」などわ、「しられる」「しさせる」「しない」「しろ」「しよう」に續かず、「秘」「具」などわ、「しない」「しろ」に續かぬようであるから、氣を付けねばならぬ。右のように活用させる事わ、全國の口語、皆、同じであるが、その未來形、命令形に、處々で、異同のあることわ、後の未來形(一八)命令形(一二七)の處で説く、次の第二類の未來形、命令形、第四類の未來形、もそうである。

○第二類 サ行上一段に活用させるもの、

じ	なぬ				
さら	れい	じ	じる	じれ	じよう
せる	る				
					じよ
					じろ

一語の漢語の「高」^{コウ}「焙」^{ホウ}「通」^{ツウ}「封」^{フウ}「案」^{アン}「感」^{カン}「談」^{タン}「判」^{パン}「煎」^{セン}「損」^{ソン}などわ、このようにも活用させる。右のように活用させるのわ、東國であつて、中部、西部でわ、このようにつか

つて居る所もあるが、又、すべて、サ行變格につかつて居る所もあり、又、案じ
 る「煎じる」など、二三の語に限つて、上一段につかつて居ると云う所もあり、
 又、「じる」「じれ」「わ、つかうけれども、其外、上下の活用わ、サ行變格につかうと云
 う所もある、けれども、今わ、東國、畿内邊で、遍く此活用につかわれると思わ
 れる「高」「焙」「案」「煎」などの數語を、上一段にも活用させるものとした、室町時代
 の義經記、義經、平家の討手に上り給ふ事に、數通の起請文を、かきしんじら
 れけれども、尙、御承引なかりければ、守武千句に、「ころもがへして、藥せんじ
 よ、春過て、夏めにけさや、なりぬらん。」江戸時代、鹿の卷筆、四、表具屋の掛物
 に、「さりとは、じよさいく、よく判じられた。」など、ある。

右の外に、「映」「詠」「命」「應」「慢」「禁」「吟」「信」「陳」「任」「減」「轉」「變」「辨」「混」「論」なども、此活用につ
 かわれるかと思ふけれども、(重んじる、輕んじる、なども)第一類のものとなす
 る方が、よいように思われる。

○第三類 サ行五段に活用させるもの、

ぬない
 ぬいぬい
 ぬいぬいぬい
 し
 す
 せ
 そ
 う
 せ

一語の漢語の「賀」「謝」「議」「辭」「解」「愛」「害」「廢」「託」「駁」「譯」「略」「祝」「熟」「復」「服」などわ、このよ

さ
せ
る
し
す
せ
そ
う
せ

一語の漢語の「賀」「謝」「議」「辭」「解」「愛」「害」「廢」「託」「駁」「譯」「略」「祝」「熟」「復」「服」などわ、このように活用させてもつかう。

右のように活用させるのわ、全國、大抵、同じである（中國、四國、九州、にわ、そうでないと云う所も、ある）けれども、民間にわ、通用が少くないようである、畢竟、學者や、書生の間で、間違えて文語に入れませつつかつた口調のものを、口語にもつかうのである、今わ、遍くつかわれると思われ、「賀」「謝」「議」「辭」「解」などの十數語を、五段活用にもつかうものとした、室町時代の史記抄の七、一四に、「理之宜然コトナレバ、書スマデモナイゾ」。（シルス）の意かもしれぬ、同、十、四二に、「一度、冤ヲ復サウト思テ、復シタゾ」。（カヘサウ）かも知れぬ、江戸時代の懷硯、三、水浴せば、涙川の條に、「常々秘す事を口走る」。寶曆頃の川柳の句に、「永日の、時を期さぬは、吞む禮者」。文化の川柳に、「御開運五常を表す御扇子」（家康の馬印、五本骨）文政の川柳に、「山鳩と、化すも冥がな、桑の虫」（山鳩色の御袍）など、随分、古くから、五段活用につかつて居る。（使役の助動詞の「させ」「させむ」「させよう」の所を見合せよ）

右の外に、「嫁」「坐」「和」「化」「期」「記」「治」「祕」「附」「具」「書」「處」「怨」「會」「對」「敬」「制」「號」「勞」「窮」「住」「供」「稱」

【九六】

動詞 サ行變格活用

「諾」「約」「宿」「刻」「食」「敵」なども、このように活用させるか、とも思われるが、まだ、全く熟して居らぬようであるから、やはり、サ行變格に活用させるがよからう。
○第四類　サ行下一段に活用させて、可能の意味とするもの、

せぬ
ない
せ　せる　せれ　せよう(命令わなない)

第三類の五段に活用する「議」「解」「譯」「託」などわ、此活用に轉じて、「解^ひ解^く」することが出来る「譯」することが出来る「の」意味、(可能)につかうことがある、常のサ行五段活用の動詞の「押さ」「指さ」に、可能の助動詞の「れる」「が」附いた「押される」「指される」「が」約まつて、「押せる」「指せる」となると、同じ道理である、(一八六)を見よ、尙、此事わ、次の可能の助動詞の所で云わう、この活用わ、全國、大抵、行われて居るが、中國、九州にわ、つかわぬと云う所もある。

【九七】　口語でわ、動詞の終止形と連體形が、同じであるから、表の中の第三活用形に、一つにした、後の形容詞、助動詞も、その通りである。

【一〇三】　文語でわ、カ行四段活用の動詞の第二活用に、「たり」を附けて、「書きたり」「稼きたり」など云うを、口語でわ、全國すべて、「書いた」「稼いだ」と云う、助詞の「た

ら」「たら」「四七一」たり」「だり」「四七七」て」「で」「四八三」に續く時も、同じである、「き」「ぎ」の

り「稼ぎたり」など云うを、口語でわ、全國すべて「書いた」「稼いだ」と云う、助詞の「た」ら「だら」〔四七一〕たり「だり」〔四七七〕て「で」〔四八三〕に續く時も同じである。「き」「ぎ」の「い」となるわ、子音が黙つて、母韻はかりになつたので「た」の濁るのわ、上の「き」の濁りの移つたのである。

稀に「書あて」「稼えだ」など云う所があり、武藏の南足立郡、入間郡でわ「急いた」「稼いた」と、清音に云い、山形縣の東置賜郡でわ「咲いだ」「挫いだ」と、濁音に云い、宮崎縣にわ「挫いた」「稼いだ」、鹿兒島縣にわ「咲いた」「咲いた」「稼だ」など云う所がある。

○「き」「い」となつたもの、「ひ」とあるも「い」である。

平安朝時代

類聚名義抄、仍ツイテ、艶、ナマメイタリ、

催馬樂、紀伊國、風しも不伊吹きたれば、同、高砂、今朝左伊咲きたる、初花に、

紫式部日記、めづらしく、心にく、なまめいてみゆ、しさまもいと、からめいたり。

法華義疏(石山寺藏、一條帝、長保四年)吐ハイテ

【九七】 【一〇三】・動詞 書いて 咲いた等

史記(狩野亨吉藏、後三條帝、延久五年) 卽、

大毘盧遮那成佛經(西大寺藏、白河帝、承曆二年) 在、

將門記(名古屋眞福寺藏、堀河帝、承德三年) 搔、

童蒙頌韻、之、ユイテ、歎、ナゲイテ、乖、ソムイテ、瑩、ミガイテ、

香藥鈔(田中光顯藏、二條帝、永萬元年) 卷、

梁塵秘抄、雜法文歌、つゑとついで、同、經歌、經には、是名持戒行づださ

(頭陀者)と、とい(説き)たれば、ほとけのみちには、さわりなし。

伊呂波字類抄、歌、ナマメイタリ、疎、スイタリ、(齒)

寶物集、下、さいのしやうげをのぞいて、阿彌陀如來をみたてまつり、

鎌倉時代

平家物語、一、妓王の事、かづいたるきぬをうちのけたるを見れば、あまに

なりてぞ出來たる。同、七、實盛さいこの事、林を焼いてかる時は、おほ

くのけだものを得るといへども、

定家假名遣、をいて、於、すいたる人、逸人、をしひらいて、排、たちをは

いて、帶劍、なひて、泣、すいて、漉、

遊仙窟、關、ツイテ、風、カゼフイテ、歎、ナゲイテ、抱、イダイテ、

いて、帶劍、なひて、泣、すいて、漉

遊仙窟、關、ツイテ、風、カゼフイテ、歔歔、ナゲイテ、抱、イダイテ、
字鏡集、關、ヒライテ、

古今著聞集、二、一五 肝たんをくだひて、全く、身命を惜まず。

砂石集、二、三二 妻ニ手ヲヒカレ、子イダイテ、

假名論語、ふうし、きせんとして、なげいてのたふまく、(夫子、喟然歎曰)

南北朝時代

平他字類抄、於、ヲイテ、

室町時代

義經記、二、伊勢三郎、義經の臣下に始めてなる事、太刀佩いて、大の手鋒を
杖につき、同、三、義經、辨慶、君臣のけいやくの事、二人は、やがて舞臺へ
ひいて、をりあふて、た、かひけるひいつす、んづ、打合ひける間、
曾我物語、五、吳越のた、かひの事、しりぞひてはらはんとすれば、鋒先ま
がれり。

幸若、夜討曾我、妻戸がなつて、きりく、とひらいた。同、烏帽子折、草刈
笛、云々、一手、吹いて、おもひでにきかせばや。

史記抄、六、一〇 雷電ガハタメイテ、マツクラニナツタ。同、十、一一 管仲、云々、

鮑叔ヲダシヌイテ、タライタゾ。

孟子抄、一、二五 牛馬庶畜ヲ切タ、イテモ、用ナシ。

廻國雜記、まりこ川、俳諧、鈴かけの、結を上て、まりこ川、おひ綱かいつ、けふ

は暮さん。

眞宗御文章、二、三三 コノウヘニヲイテ、ナヲ、身ノフルマヒニツイテ、コノム

子ヲ、ヨクコ、ロウベキミチアリ。

閑吟集、たゞおいて、霜にうたせよ、夜ふけて來たが、にくい程に。

太秦、牛祭祭文、牛に鞍を置き、大闢をすりむいて、かなしむもあり。

運歩色葉集(甲) 逸人、スイタルヒト、窈窕、ナマメイタル、

節用集(甲) 就、ツイテ、於、ヲイテ、

狂言記、萩大名、打開いた景のよい庭でござる。同、釣狐、彼者が、犬など

を飼ふて置いたらば、

江戸時代

徒然草抄、下、禹ニ命ジテ討ゼシム、禹ユイテ、兵ヲカヘシ、云々、

醒睡笑、一、きやつを、馬の丞とつけたれば、いさみて、はやいな、いたよ。

徒然草抄下、禹ニ命ジテ討ゼシム、禹ユイテ、兵ヲカヘシ、云々、

醒睡笑、一、きやつを馬の丞とつけたれば、いさみて、はやいな、いたよ。

同、八、鐘をばてんきくやとた、いて、笛を、ひよりやひよりとふいたもの、

太閤記、二、四四 大氣者におひては、天下無雙の男なるべし。

犬子集、十、冬、右も左も、きいたうでさき。

油糟、雜、口あひた、人を繪にかく、渡し船。

正章千句、一、鶯、うつぶいて、どうぞめされよ、船遊。

吾吟我集、二、ゆり、つぼめるや、帽子させたる、鹿子ゆり、ひらいた花は、いふにをよばず。

小栗の判官、二、鬼鹿毛、云々、只、あな、いて、八方八つのくさりを、しつと、のし、

後撰夷曲集、九、老人、雀ほど、ちひさく老の、身はなれど、ういたる人は、をどり忘れぬ。

○「ぎ」の、「い」となつたもの、「ひとあるも、「い」である」

平安朝時代

【二〇三】 動詞 凌いで 防いだ等

大智度論(近江石山寺藏、文德帝天安二年) 次第ツイデ

類聚名義抄、接ツイデ、班ツイヅ、

童蒙頌韻、疼ヒイライデ、磨トイデ、

伊呂波字類抄、諧ヤハライデ、

梁塵秘抄、二、雜、うかる(鶉飼)は、くやしかる、なにしにいそいで、あさりけむ。
寶物集、上、人々の、しりさはひで、物のあはれも、さむるほどなり。

鎌倉時代

平家物語、二、座主流し、兜をぬひで、ほうしばらにもたせ、同、二、新大納言
死去の事、はるくと、多くの波路をしのひで、行ところなり。

定家假名遣、しのいで、凌、

砂石集、四、一五、鼻ガウソヤイデ、オカシキゾ。

假名論語、郷黨篇、みたび、かひでたつ。(三嗅而作)

室町時代

義經記、三、頼朝謀叛の事、櫓の柱に、馬をつないで、源氏をまぢかけたり。
曾我物語、一、かはづの三郎うたれし事、つるのもとじろにてはいだる、し

らこしらへのしらや、

義經記、三、頼朝謀叛の事、櫓の柱に馬をつないで源氏をまちかけたり。
曾我物語、一、かはづの三郎うたれし事、つるのもとじろにてはいだるし

らこしらへのしらや、

幸若、入鹿、一つの鋒をあたへよ、ふせいでみんなとの宣旨なり。三年があ

ひだ、塞いだる兩眼をくわつとみひらき、

狂言記、宗論、愚僧もいそいだ。同、素襖落、ひらに、ちようと注いで下さ

れい。

節用集(丁) 仰而唾、アホヒデ、ツバキヲハク。

江戸時代

醒睡笑、七、代二百、つないで懐中せし。

西翁十百韻、奥州へ遣はす、いそいでまるれ、沖の魚舟。

雑兵物語、下、草履取、柿、一つ、ひんもひだれば、がひに面白いきざしがでた。

○サ行五段活用の動詞を「た」につゞける時、「指した」「出した」「崩した」「濟した」な

ど、文語のまゝに云うわ、關東、奥羽、山梨縣、長野縣、新潟縣であつて、それから

西、畿内、四國にわ、稀に、「指いた」「崩いた」「濟いた」などをませて云う、「し」の子音が失

せて、母韻ばかりになつたのである、助詞の「たら」「四七一」「たり」「四七七」につゞけ

る時も同じである、(京都、大阪にわ、「指いた」の一語あるばかりで、其外わ、皆「した」

【二〇三】 動詞 指いて 出いた等

と云う、中國、九州の處々にわいて、又わえたと云う所が多いけれども、サ行五段活用の動詞が残らず、そうでわかない、語に因つてわしたと云うのもある、つまり、一つに定まつてわ居らぬ、それに、指した、咲きた、共に、さいた、さいたとなり、出した、抱きた、共に、だいた、だいたとなつて、紛れやすいから、すべて、したときめた、文語とも一つになる。

武藏、南足立郡に、消いて、押いて、群馬縣、群馬郡に、消いて」と云う所がある。

滋賀縣にわ、指いさせ、出いさせ」と云う所があり、和歌山縣の新宮、安藝、山口縣邊にわ、消ひた、流ひた、など云い、佐賀縣、熊本縣にわ、指あて、出あて、落えた、残え、離あて、流あて、暮あて、殺え、潰いて、延あて、など云い、大分縣にわ、指え、出え、など云い、宮崎縣にわ、指ち、出ち、残いた、など云い、鹿兒島縣にわ、指ち、落ち、離ち、殺ち、濟ち、など云う所がある。

○「し」を、「い」と云つて居たもの、「ひ」とあるも、「い」である。

平安朝時代

神樂歌、早歌、巾子、於止以津。(落しつ)

宇津保物語、菊の宴、おぼしめいて、のたまはするにこそはあめれ。

落窪物語、一、物引きかづきて、ふい(臥し)たらむ。

神樂歌早歌 巾子於止以津(落し)
宇津保物語、菊の宴、おぼしめいて、のたまはするにこそはあめれ。

落窪物語、一、物引きかづきて、ふい(臥)したらむ。

源氏物語、浮舟、見あらはいたるを、同、手習、姫君のおはしまいたる、

更科日記、冬になりて、ひぐらし、雨ふりくらいたる、

阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行法儀軌(石山寺藏、堀河帝、嘉保二年)

ユルイテ
放、

大慈恩寺三藏法師傳(興福寺藏、鳥羽帝、永久四年) 乾ホイトテ

高僧傳(石山寺藏、二條帝、長寛元年) 播ホドコイテ

香藥鈔(田中光顯藏、二條帝、永萬元年) 果ハタイテ

梁塵秘抄、二、二句神哥、須磨のうらに、ひきは(乾)したるあみの、

鎌倉時代

平家物語、一、鵜川合戦の事、寺僧ども、湯をわかひてあびける。同、一、内裏

炎上の事、てんでに、まつ火をともして、京中をやくとぞ、人々のゆめに

みえけり。同、四、橋合戦の事、大長刀のさやをはずひて、はしのうへに

ぞ、す、んだる。同、十一、弓流、美尾屋十郎は、小太刀、大長刀に叶はじと

や思ひけん、かいふいて(搔伏)逃ければ、

【二〇三】 動詞 指いて 出いた等

南北朝時代

五

太平記、二十三、土岐頼遠、參會御幸、狼藉被死刑事、(神田男爵藏本) 往來ノ貴賤、群リヲナイテ、タチ留マリテ、云々、

室町時代

義經記、六、忠信最後の事、此刀をすてたならば、云々、ひざの下にをしかくいて、きず口を引あけ、

幸若、富樫、寫しもうついたり、かきもかいたる繪かな。同百合若、蒙古がまなこを、射つぶいたり。

史記抄、十、一二、管仲ガ、欺テタライタレドモ、鮑叔ハ、其ヲモ、ナニトモ思ワヌゾ。同、十、二三、桃ヲ食テ、アマリ甘イトテ、食イサイ(殘し)テ、君ニマイラセタレバ、

孟子抄、一、一九、百姓ノ耕作スル物ヲ、カリダイテ、園囿ヲ作りナドシテ、閑吟集、鎌倉へくだる道に、竹へげの丸ばしをわたいた。戀の中川、うつかとわたるとして、袖をぬらひた。

狂言記、墨塗、一段と、でかいた。いや、思ひだいた。同、吃、あ、ゆるいて

くれい。往ないて下されい。同、釣狐、此間、狐を釣る程にく、某の類

狂言記、墨塗、一段と、でかいた。いや、思ひだいた。同、吃、あ、ゆるいて

くれい。往ないて下されい。同、釣狐、此間、狐を釣る程にく、某の類
を、悉く釣り絶やいて御ざる。

伊曾保物語、又、叱らる、に、肝をつぶいたれば、同、わが腹中をひるが
へいて、御目にかけう。

江戸時代

醒睡笑、二、われは、日本一の事をたくみだいたは、といふ。同、七、なに、狸
の王ぢや、王ならば、射ころいてくれうず。

昨日は今日の物語、何より、めいわくいたいた。

犬子集、十四、雑、上、ほそ谷川で、すそをぬらいた。

油糟、雑、はなれし牛を、誰もどいたぞ。

正章千句、二、花、ひめをく閨に、さかりすごいた。

天狗羽打、二段、馬に白あわはませ、馬の貳しやう引まはいて、三べんのり、

古今夷曲集、五、正直の、神のちかひの、かの字にし、濁をさいいた、身をいのる
なり、

○文語の夕行四段活用の動詞を、「たり」につゞける時、文語でわ、「打ちて」「勝ち

たりなど云うを、口語でね、全國、皆、打つて打つた勝つて勝つた」と云う、助詞の「たら」四七二「たり」四七七につける時も同じである。

富山縣の下新川郡に「打た」と云う所があり、宮崎縣に「勝つた」又わ「勝た」と云う所もある。

○「ち」「つ」となつたもの、

平安朝時代

源氏物語、帚木に、「盃もて出で、同、若紫に、「僧都、きんをみづからもてまゐりて、」など、「ち」を省いて云つたのもある。

今昔物語、廿五、源宛平良文合戦語、各ノ弓ヲ取テ、箭ヲ放ツテ馳セ違フ。寶物集、上、百千の劔をもつて、さきわるがごとし。

鎌倉時代

平家物語、七、實盛さいごの事、光もりこそ、きいのくせ者と、くむで、うつて、參つて候へ。同、九、小宰相の事、戒をたもつて、主の後世をぞとぶらひける。

古今著聞集、十、久清、丈尺にてうつて見れば、梓、例よりも、一丈あまり、遠く

立たりけり。

古今著聞集、十、久清、丈尺にてうつて見れば、梓、例よりも、一丈あまり、遠く

立たりけり。

假名論語、子路篇、ざんにかつて、さつをすつべし。(可以勝殘去殺矣) 同、

泰伯篇、天かを三ぶんし、そのふたつをたもつて、もつて、ゐんにふくじす。(三分天下、有其二、以服事殷)

室町時代

義經記、二、鬼一法眼の事、ことばをはなつて、仰有ければ、同、四、義經都落

の事、ふねのへさきにつ、たつて、人にむかつて、物をいふやうに、

曾我物語、六、和田よしもり酒もりの事、まかりたつて、かさねて參るべし。

同、七、矢たてすぎの事、合戦するに、なんなくうちかつて、歸りのぼりぬ。

幸若、百合若、雲の上に、光をはなつてつくるべし。同、入鹿、親子わりな

き中ならば、れう王をうつてたべ。

史記抄、十、四八、我ヲアザムクカト思テ、ハラダツタリ。

孟子抄、一、一四、國ヲモツタ者ハ、人ノ國ヲ取タガリ、

狂言記、宗論、愚僧は、其様に待つてはならぬ。同、酢薑、何方なりと、云勝

つた者が賣物の司を持たう。

【二〇三】 動詞 打つて 勝つた等

伊曾保物語、熟柿を持つて来て、主人に捧ぐれば、

江戸時代

醒睡笑、二、うつけのもの、これを見つげ、手をうつてかんずる。

雑兵物語、下、矢箱持、棒におとつた弓をもつて、捨てべいかと思つたれば、

○文語のラ行四段活用の動詞を、て「たり」につゞける時、文語でわ、「取り」て「切り」たり「など云うを、口語でわ、全国、すべて、「取つて」「取つた」「切つて」「切つた」と云う、助詞の「たら」「たり」につゞける時も同じである。

富山縣の下新川郡にわ、「取^ミた^テ」と云う所があり、宮崎縣にわ、「取^ミつ^チた^チ」又わ、「取^ミた^チ」と云う所がある。

○「り」の、「つ」となつたもの、

平安朝時代

將門記(名古屋眞福寺藏、堀河帝承德三年) 舐^{チツテ}、

童蒙頌韻、彌、ワタツテ、群、ムラガツテ、蹲、ウツクマツテ、飄、ヒルカヘ

ツテ、遮、サヘキツテ、

鎌倉時代

平家物語、一、禿童^{かぶろ}の事、十四五のわらべを、三百人すぐつて、かみをかぶる

平家物語、一、禿童かぶらの事、十四五のわらべを、三百人すぐつて、かみをかぶるにきりまはし、同、一、願立の事、しゆと、おほく、きずをかうぶつて、まいりてうつたへ申。同、二、あしずりの事、僧都、舟にのつてはおり、おりてはのつつ。同、十、だいら女ばうの事、人に、くるまかつて、つかはされにけり。

遊仙窟、隔、へダ、ハ、ツテ、

字鏡集、灑、ニゴツテナガレズ、

古今著聞集、二、あみだ和讃をつくつて、自他をしてとなへしめける。

砂石集、序、時ニアタツテハ、光陰ヲオシマズ、

前に舉げた將門記に、「舐、子ブテ」(ねぶりて)平家物語に、「何になて」(成りて)船にのて「(乗りて)遊仙窟に、「奉、ウケタマハテ」横、ヨコタハテ」透、ホドバシテ」吾妻鏡、元暦二年正月六日、頼朝の狀に、「佐々木三郎、筑紫へは下くだりさがりたるによて、下して備前兒島をば責落たるなり」。砂石集、一、に、「マコトニハ、事スギテ空シキノミアラズ、時ニアタテ(當りて)モ、自性ナキ故ニ空也、故ニ、生ニアタテ不生ナリ」。同、三、に「世ニアテ(在りて)ハ、人ニモシラ

レズ、名利モナキ人、遁世門ニ入テハ、云々、」同、四、に、「眼アテ（ありて）明ノ中ニアルガ如シ」孟子抄、一、二七に「田横ハ五百人デ一島ヲコシラヘテコモテイテ（籠りて居て）など」りを略して言つたのもある。

假名論語、先進篇 せんせうのくに、たいこくのあひだにはさまつて、くわふるに、しりよをもつてして、千乗之國、攝乎大國之間、加之以師旅」同、子路篇 せう人は、おごつてゆたかならず。（小人、驕而不泰）

室町時代

義經記、一、吉次おうしう物語の事、わたのきよひらと申候ひし、兩國を手ににぎつて候し。同、四、義經都落の事、たゞ帆の中をやぶつて、風をとをせとて、同、五、忠信都へしのび上る事、欲にふけつて、合戦に忠をいたしたるとても、云々、

曾我物語、五、吳越のたゝかひの事、三冬にうづくまつて、一陽來復の天を待つ。同、八、仁田がしゝにのる事、猪のしゝ、云々、大きにたけつて、はせまはる。

幸若、和田酒盛、おうち伊藤の入道よりつたはつたるさかおもだかのは

らまき、同、敦盛、異國の樊噲が、わたつて乗つたりとも、あれほどの小

まはる。

幸若、和田酒盛、おうぢ伊藤の入道よりつたはつたるさかおもだかのは

らまき、同、敦盛、異國の樊噲が、わたつて乗つたりとも、あれほどの小舟に、何程のことのあるべき。

謠曲、高砂、梅花を折つて、かうべにさせば、同、田村、北にあたつて、入相の鐘の聞え候は、

史記抄、六、二四 上へカエツテ讀ム例ガ、イクラモアルゾ。同、六、二九 ホ
リヲホツテ、河水ヲ引テ、要害ヲ守ルゾ。

孟子抄、一、三 周ノ幽王ノ時、犬戎ノエビスニ破レテ、東周ニナツテ、洛邑へ
ウツツテカラ、周ガ衰ヘタゾ。同、一、四 壅底ハ、ウチフサガツタ體ゾ。

辨慶物語、上、にやく一わうじへ參り、いのられければ、云々、御むさうにあ
づかつて、

倭玉篇(甲) 仍、ヨツテ、

狂言記、ひめ糊、紺屋へ遣つたる肩衣は、張つて參つたか。同、伯母酒、每
年、酒を作つて、商賣致さるれ共、殊の外、吝い人でござつて、何時參つても、
酒、一つ飲め、と云はれた事がござらぬ。

伊曾保物語、柿を預かつた者共、思ふ様は、食しをはつて後、大きな荷

【一〇三】 動詞 取つて 切つた等

があつたを、エソポ、それ^レを持たうといへば、

江戸時代

徒然草抄下、語ガアヤマツテ、想夫憐ト云々事ヂヤ。

醒睡笑一、寺院を、他人に、誤つても不讓を法とするまゝ、
同六、海老を
いつて、炒りて河へはないたやら、お知りあつたかと、

太閤記、或問、よき人も、尋やうによつてあらんか。

犬子集、春、上、子日、松根に、腰をさすつて、ねのび哉。

小栗の判官二、只今の玉づさを、ものをしつて、やぶらせ給ふか、又は、しら
いで、御やぶりあつてましますか。山中の大瀧がたぎつて、さつくと
落るがごとくなり。

雑兵物語、上、持槍擔、馬、云々、芭蕉毛のところを、かばと突いたれば、先へ五
間斗つんぬいて、すべつてころんだが、仕合と、鎗を持つてねまつた、云々
乗人も、まつさか様に落て、ふんぞつた。

○文語のハ行四段活用の動詞の「言ひ」「買ひ」を、口語でわ、「言い」「買い」と云い、それ
に、「た」が附けば、「言つた」「買つた」となるわ、静岡縣、山梨縣、長野縣から東が、大抵

そうであつて、愛知縣、岐阜縣、新瀉縣でわ、「言うた」「買うた」をませて云い、それか

○文語のハ行四段活用の動詞の「言ひ」「買ひ」を、口語でわ、「言い」「買い」と云い、それ
に、「て」「た」が附けば、「言つて」「買って」となるわ、静岡縣、山梨縣、長野縣から東が、大抵

そうであつて、愛知縣、岐阜縣、新潟縣でわ、「言うた」「買った」をませて云い、それか
ら西わ、九州まで、大抵、「言うた」「買った」と云う、助詞の「たり」「り」にも同じように
續く、初わ、兩立させようと、案を立てたが、決議の末に、「言つた」「買った」とするこ
とになつた。「言うた」「買った」わ、語根まで變わる事となる、但し、「請ひ」「問ひ」「給ひ」
わ、「請うた」「問うた」「給うた」とする。

武藏、群馬縣、青森縣に、「笑うた」「言うた」など云う所があり、伊勢、攝津、丹後、鳥取
縣、島根縣、佐賀縣、宮崎縣にも、「笑つた」「戦つた」など云う所もあるが、誠に少い。
京都、大坂、和歌山縣の新宮でわ、「拂た」「拾た」など云い、宮崎縣に、「言ち」「拂ち」「拾ち」
など云い、鹿兒島縣に、「拂ち」「拾ち」など云う所がある。

○「ひ」「う」となつたもの、「ふ」と書いてあるのも「う」である。

平安朝時代

宇津保物語、俊蔭、加茂に詣でたまうたりしかば、

催馬樂、酒飲、酒をたうべて、たべ惠宇天ヨバウテ（醉ひて）

法華義疏（石山寺藏、一條帝、長保四年）喚ヨバウテ

狭衣、一、うちすてたまうつ、

【二〇三】動詞 言うて 買った等

今昔物語、二十二、高藤内大臣語、御狩衣指貫ナド、炮干サムト云ウテ、取テ入ヌ。

將門記(名古屋真福寺藏、堀河帝、承德三年) 繕ツクロテ

大慈恩寺三藏法師傳(興福寺藏、鳥羽帝、永久四年) 候ウカウテ 逐オウツ

童蒙頌韻、禪、ヲギヌウテ、伺、ウカバウテ、詢、トブラウテ、

高僧傳(石山寺藏、二條帝、長寛元年) 倩ヤトウテ

寶物集、下、いそぎかへりて、長者にむかふていひけるは、

鎌倉時代

平治物語、一、信賴信西不快の事、伏見源中納言師仲卿をかたらうて、彼在所に籠り居り、

平家物語、一、妓王事、今様一つぞ、うたうたる。同、二、有王が島くだりの事、片手には、魚をもろうて、もちあゆむ。同、七、實盛さいごの事、わ

か殿原にあらそふて、さきをかけんも、おとなげなし。

遊仙窟、通、カヨフタル、(向、ムカテ、とばかりもある)

古今著聞集、六、めしにしたがふて參候。同、八、水干の袖に、むばらこき

に、雀の居たるをば、ぬふたりけり。

遊仙窟 通カヨフタル(一向ムカテ)とはかりもある
古今著聞集、六、めしにしたがふて參候。同、八、水干の袖に、むばらこき

に、雀の居たるをば、ぬふたりけり。

砂石集、二、井ノ底ヨリ、此ノヲサナキ者オフテ、出給ト見テ、同、三、只、名
バカリ、受戒トイフテ、云々、大小ノ戒相モシラズ。

室町時代

義經記、四、土佐房、義經の討手に上る事、おのれは、手を負ふたるか。同、五、
判官、よし野山に入給ふ事、しらびやうしも、一番まふてぞ入にける。

曾我物語、五、吳越のたゝかひの事、馬のいきの、きるゝほどぞ、おふ(追ひ)た
りける。同、八、すけつねが屋かたへゆきし事、さかづき取りあげて、云
々、そのかはらけ、すけつねこうて、(請ひ)てかたゝは、何と思ひ給ふらん、
云々、

幸若、和田酒盛、あさいながめてのわきに、さいたる刀、ひんばうて、(奪ひ)て
ねだのこゝろもとに、さしたて、よしもりがぞんじには、ばつくんちが
ふて存ずる。同、夜討曾我、妻戸がなつて、きりくゝとひらいた、兄弟の
人々、さうのわきにひつそうて、(添ひ)てすまひて、ものを見給へば、

史記抄、五一五、諸侯ガ、モシ、シソコナウタラバ、同、十二、五、蒲伏ハ、ハラバ

【二〇三】 動詞 言うて 買うた等

イニハウタゾ。

孟子抄九、二五 羊ノ皮五枚ニ、身ヲ賣テ、ソレカラ、牛ヲカウテ、秦ノ穆公ニ取
入タト云。

田村の草子、上、いそぎとしむねにむかふて、したかへよとのせんじ下り
ければ、同、下、只今、なんぢが、うつてむかふたるものを、いかなるもの
とか、おもふらん。

辨慶物語下、此程は御ざうしに、矢ちがへの法はならふつ。

狂言記、宗論、世間に、事足らうた御方もあり。同、拔殻、さあ飲め、はあ、い
かう酔うたかな。

狂言記、苞山伏に、「鶯がくたか、鶯がくたら、蓋がせずにあらうに、誰がくた
ぞ、など、食うたが、くたともある。

梅津長者物語、夜もすがら、うたふつ、まひつ、しゆるんなり。

詠歌之大概、先達の詞にて、みえたるも、随分の人の、取あつかふたるが好
也。

伊曾保物語、其熟柿をば、何と思つて、取つてくらうたぞ。

也。

伊曾保物語、其熟柿をば、何と申うて、取つてくらうたぞ。

江戸時代

昨日は今日の物語、心得申たると、うけごうて、さて、方々、けんぶつしてかへり、

醒睡笑、一、けしからず、饅頭をすく者あり、さすが、買うてはくひともし、太閤記、二、取々に、争ひ合ふて、氣を取失ひし者もあり。

犬子集、六、冬、雪、雪のよは、竹もかこうて、ねざ、哉。

犬子集、一、春、上、春草に、「たんぽゝの、あへ物くてや、舌つゝみ。」同書、四、秋、上、葛に、「くゝてほめぬ、人はうらみよ、葛だんご。」など、「食うて」を、「くゝて」とも用いてある。

油糟、冬、さむさにや、千はやふるふて、たてるらん。同、雜、慰に、たゞ土佐駒を、かふてやれ。

小栗の判官、一、うつくしうしたゝめたる文、一つう、ひろうて有。

諸國盆踊唱歌、駿河、しつてをれども、人にまたとふて、母のさしづで、むかひとれ。

諸國盆踊唱歌、長門、「こいとゆたとして、ゆかれるみちか。」など、「云うた」を、「ゆ

【一〇三】

動詞 言うて 買うた等

た」とつかつてある。

西翁十百韻、一、朝手水、つかうてはきく、ほとゝぎす。

○「ひ」の「つ」となつたもの、

平安朝時代

童蒙頌韻、遵、シタガツテ、歌、ウタツテ、償、ツクノツテ、

寶物集、上、夜ことに、五つづゝ、子をうみ、うむにしたがつて、みなみづからくふなり。

鎌倉時代

平家物語、一、清水炎上の事、高きも、いやしきも、肝魂をうしなつて、四方へ、みなたいさんす。同、二、座主流し、あざわらつて、申けるは、同、十二、女院御出家の事、秋の月、雲にともなつて、かくれやすし。月を忍いせし夕には、雲おほつて、光をかくす。

古今著聞集、七、田園を損亡する事、年をおつて、はなはだしきなり。

假名論語、先進篇、くわいは、それ、こいねがつて、しばゝむなし。(回也、其庶乎、屢空) 同、憲問篇、あぢかになつて、こうしのかどをすぐる物あり。

(有、荷簣而過、孔氏之門者)

假名論語、先進篇、くわいは、それ、こいねがつて、しばくむなし。(回也、其庶乎、屢空) 同、憲問篇、あぢかをになつて、こうしのかどをすぐる物あり。

(有、荷、簣、而、過、孔、氏、之、門、者、)

神代紀、下、に「衢神問、曰、假名論語、顔淵篇に、「あひこうゆうぢやくにとつていわく、「哀公問、有若曰、同、季子篇に、「いつをとつて、さんをえつ、「問一、得三」など、「問ひて」を、「とつて」とあるわ、めずらしい、奥州本、義經記、(改定史籍集覽、安永八年の奥書がある)にも、「今日のうつ手は、いかなる者ぞと、とつたれば、やすひらが家の子に、長崎太郎大夫といつたアげだ、」などともある。

室町時代

義經記、一、かゝみの宿にて、吉次宿に、がうどう入事、をつ、まくつ、さんく、にた、かひ、同、四、義經都落の事、人にむかつて、物をいふやうに、かきくどきて申やう、

曾我物語、五、吳越のた、かひの事、したがつては、臣下、心ざしをほうせざるこそ、むねんなれ。

幸若、文覺、法性隨妄の雲、あつくおほつて、十二因縁の峯にたなびき、同、百合若、敬つて申すと、書きとめて、

【二〇三】

動詞 言つて 買つた等

江戸時代

醒睡笑、二、日本左衛門とつきたきよし申しけり、東堂あざわらつて、さやうの大なる名は、めづらし過て、云々、

太閤記、三、小屋を、小路く、もやつて、作りならべ、

雑兵物語、上、鐵砲足輕小頭、刀を抜て、敵の手足をねらつて、切りめされい。

同、下、矢箱持、馬に負はせた箭、かたくの箱に、貳百筋せおつた。

雑兵物語に、「痛手を負んだ」とあるわ、めずらしい。

○「ひて」ひたりを、音便に、「うて」うたりとも云い、「つて」つたりとも云うわ、動詞に因つて、何か區別があるかと思ふに、寶物集、上に、「夜ごとに、五つづ、子をうみ、うむにしたがつて、みな、みづからくふなり」とあるに、古今著聞集、六に、「めしにしたがふて參候」とあり、寶物集、下に、「いそぎかへりて、長者にむかふていひけるは、平家物語、一、清水炎上の事に、武士、けんびいし、西坂本にゆきむかつて、ふせぎけれども、平治物語、一、信賴信西不快の事に、伏見源中納言師仲卿をかたらうて、彼在所に籠り居り、平家物語、二、座主流しに、居なをりあざわらつて申けるは、五、咸陽宮の事に、「よき兵をかたらつてこそ、まいらせめ、同、五、伊豆院宣

の事に兵衛のすけ殿あざわらふて云々、砂石集、三に、「只、名バカリ、受戒ト云フ

らうて、彼在所に籠り居り、平家物語二座主流しに居なをりあざわらつて申けるは、五、咸陽宮の事に、よき兵をかたらつてこそ、まいらせめ、同、五、伊豆院宣

の事に兵衛のすけ殿あざわらふて云々、砂石集三に、只、名バカリ、受戒ト云フテ、云々、大小ノ戒相モシラズ、假名論語、郷黨篇に、きう、いまだたつせず、といつて、あへてなめず、(曰)丘未達、不敢嘗、同、憲問篇に、はくしのへいゆう三はくをうばつて、(奪)伯氏駢邑三百、幸若、和田酒盛に、あさいながめてのわきにさいたる刀、ひんばうて、幸若、烏帽子折に、烏帽子をたまはれ、小結こむすひを結ふて參らせん、同、高館に、直垂のくゝりを結つて、しめたりけり、などと、同時、同一の書に、どちらも、つかつて居るから、二つながら、勝手に、ませて用いて居たものと見える。しかし、今の口語にわ、西國わ、うて、うたで、東國わ、つて、つたと、大凡に別れて居る。

○ナ行變格活用の動詞の「死に」「往に」の「て」「た」に、續く時わ「死んで」「往んだ」など、なること、全國の口語に、皆同じである、助詞の「たら」「四七一」「たり」「四七七」に、續くにも「だら」「だり」となる、但し、「往ぬ」と云う語わ、東國でわ、つかかわない、九州にも、つかかわない所がある。

○「に」「ん」となつたもの、

鎌倉時代

【一〇三】

動詞

死んで

往んだ等

七三

假名論語、郷黨篇、ほうゆうしんで、よらんところなし。(朋友死、無所歸) 同、泰伯篇、しんでのちにやむ、又、とをからずや。(死而後已、不亦遠乎)

室町時代

幸若、鞍馬出、牛若殿の御はかせひらめくとみえしかば、手のうらいまだかへさぬまに、六人死んで、三人は、痛手負うてぞひれふしける。

史記抄、六、三二 此劔ハ、飛デインダト云。

孟子抄、一、一四 宜臼モ、申ノ國へ走テインダソ。 同、九、二六 ソレカラ、臆テインダレハ、案ノ如ク、晉カラ虞ヲ取タゾ。

狂言記、拔殻、彼の清水へ行て、身を投げて、死んでのけう。 同、智貫、夜前女ぢや者と言葉論を致したれば、ついと出てござるが、其邊を尋ねますれども居りませぬ、定めて親の所へ往んだ者でござる。

江戸時代

昨日は今日の物語、あるもの、久々そひたる女ばうを、にはかにいやがり、そなたをみれば、むねがわるい、がてんづくにて、いんでたもれ、と云ふ。

油糟、雜、しんだかとおもへば死なぬ、酒の酔。

懷硯、一、案内知つて、昔の寢所、一年近く、知れざれば、愈死んだに疑なく、

油糟、雜、しんだかとおもへば死なぬ、酒の酔。

懷硯一、案内知つて、昔の寢所、一年近く、知れざれば、愈死んだに疑なく、云々、

○バ行四段活用、又わ、マ行四段活用の動詞の「呼び遊び」又わ「飲み頼み読み」などにて「た」を續ける時に「呼んだで遊んだで飲んだで讀んだで」と口語に云うわ、東國一圓から、西わ、中國、四國まで、大抵、同じである、しかし、富山縣、石川縣、美作、備中、出雲等にわ、稀に、「飲うだで頼うだで」など云う所があり、廣島縣、山口縣、石見、高知縣にも「飛うだで遊ぶだで飲うだで頼うだで讀うだで」など、云つて、又「飲んだで頼んだで」などませ、て云う所もある、九州でも、大抵、二つをませて用いて居て、「んだで」ばかりなのわ、福岡縣で、「うだで」ばかりなのわ、熊本縣である、今わ、用いるところの多いのに因て、「んだで」に定めた、そうして、是等が、助詞の「たら」〔四七一〕「たり」〔四七七〕に續くにも、「だら」たりとなる。

千葉縣の山武郡でわ、「飲んたて」と、清音に云う。

大分縣でわ、「飛うだで遊ぶだで飲うだで讀うだで」など云い、宮崎縣にわ、「飛だち遊ぶだち飲だち讀だち」と云う所がある。

○「び」の「ん」となつたもの、「む」とあるのも、「ん」である。

【一〇三】 動詞 呼んで 飲んだ等

平安朝時代

阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行法儀軌(近江、石山寺藏、堀河帝、嘉保二

年) 喚ヨムテ

童蒙頌韻

哈、ヨロコ_ンデ、飛、ト_ンデ、呼、ヨ_ンデ、邀、ア_ソン_デ、覃、ヲ_ヨ

ン_デ、

鎌倉時代

平家物語、一、二代後の事、世、げうきにおよんで、人、けうあくを先とするゆ

へ也。同、二、座主流し、おめきさけんで、咒詛しける。同、二、新大納言死

去の事、あかの水をむすんで、父の後世を弔ひ、同、四、高倉宮園城寺入

御の事、大衆、大にかしこまりよるこんで、法輪院に御所をしつらひ、

遊仙窟 雙、ナラム_デ、哽咽、ムセン_デ、

假名論語、述而篇、そのよきものを忍らんでしたかふ。(擇其善者而從之)

同、泰伯篇、そうし、やまひあり、もんでいしをよんでいわく、(曾子有疾、召

門弟子曰) 同、衛靈公篇、なむぢ、われをもつて、おほくまなんで、しれる

人とするか。(女、以予、爲多學而識之者與)

室町時代

門弟子曰、同、衛靈公篇、なむぢわれをもつて、おほくまなんで、しれる人とするか。(女、以予、爲多學而識之者與)

室町時代

義經記、三、辨慶、洛中にて人の太刀取し事、太刀をぬいて、とんでかゝる。

曾我物語、六、ふつしやうこくの雨の事、夏の蟲、とんで火に入。

幸若、文覺、岩泉、むせんで、布をひき、嶺猿、さけんで、枝にあそぶ。同、百合若、

吉日をえらんで、都出とぞ聞えける。

謠曲、大原御幸、左右の脇にはさみ、云々、海中に飛んで入る。

狂言記、吃、胸で、しやんと結んで、

江戸時代

醒睡笑、一、くんづ、ころんづ、膳次なかりつるが、同三、暮におよむで、座を立つ時、

懷硯、三、水浴せば涙川、誰が娘を呼んだといへば、

雑兵物語、上、持槍擔、先へ、五間斗つんぬいて、すべつてころんだ。

近年の口語文に、上一段活用の動詞にまで用いて、「色が黒みを帯んで居る、足利氏が亡んでから、着物がほころんだ」など、見えるわ、許されぬ。

○「び」を、「う」と云つて居たもの(「ふ」と書いてあるも「う」である)

【一〇三】

動詞

呼うで

飲うだ等

平安朝時代

香藥鈔(田中光顯藏、二條帝、永萬元年) 呼コラフ

鎌倉時代

平家物語、二、新大納言死去の事、大納言の北の方は、都の北山雲林院のへんに、しのふ忍びでおはしけるが、御返事を書いて、給たうた(給たび)たりければ、同、十一、さかろの事、海上に出うかふ浮びだるとき、風こはければとて、とどまるべきか。

室町時代

幸若、和田酒盛、虎なゝめによろこふ十郎のかたへ、つかひをたつる。
同、鞍馬出、山科の寺のかたはらに、ふかく忍うでいたりけり。
謠曲、海士、御前にて、そと、學うで、御目にかけて候へ。
史記抄、三、五〇、春秋ノ魯トナラウ並びテ、魯ハ南ニアリ、齊ハ北ニアルゾ。
同、十、三二、魯君ノキレヲヨウテ疑テ吳起ニカウ云ワレタゾ。同、十四、
二一、食物ヲ、モチハコウテ、行成スルモノニ、云々、
孟子抄、十、二、善惡ヲエラウ擇びテ、用ガナイゾ。

狂言記、墨塗、こちへよう呼びで、逢ふてもよけれど、こなたも、よろこぶで

孟子抄、十、二 善惡ヲエラウ(擇び)テ、用ガナイゾ。

狂言記、墨塗、こちへよう(呼び)で、逢ふてもよけれど、こなたも、よろこぶで
下されい。同、萩大名、是は、聞き及うだよりは、打開いた景のよい庭ぢ
やなあ。同、二千石、御暇を申上たりとも、とても、下さるまいと存じ、忍
うで、京内参りを致してござる。疊の縁につまづいて、轉(ころ)うでござれば、
伊曾保物語、躍りつ、跳ねつ、喜うで道をおるいた。主人、旅せらるゝに及う
で、下人共に、荷物を負はせらる。

江戸時代

小栗の判官、二、あれく、御らん候へや、あれに、むねかどの、二けんならふ
(並び)だるは、五人のきんだちの御家かし。

鹿の巻筆、二、にせ八島、兄の三郎兵衛はおはさぬか、とひそかに呼うで通
りける。

○「み」の、「ん」となつたもの、「む」と書いてあるのも「ん」である

平安朝時代

類聚名義抄、歔歔、ハナス爪リシカナシムデ、「爪」わ、古體の「ス」の假名である。
土佐日記、手をきるく、つん(摘み)だる菜を、

【二〇三】 動詞 呼うで 飲うだ等

神樂歌、蟋蟀キリギリス 木の根を保利波牟天ホリツハムテン（掘り食みて） 催馬樂、老鼠、西寺の老

鼠、若鼠、於牟裳都无川、介左川牟川オムモツムムツケサツムツ（御裳嚙みつ、袈裟嚙みつ） 神樂歌、大

宮、大宮の西の小路に、菖蒲己牟太利コシヤブメコムタリ（込みたり）

史記、（狩野亨吉藏、後三條帝、延久五年） 盜ヌスムデ

法苑珠林、（法隆寺藏、崇德帝、長承三年） 裏ウラムデ

今昔物語、二十二、大織冠始賜藤原姓語、大臣、此レヲ聞テ、驚キ泣キ悲ンデ、

今ハ、世ニ有リトモ、何ニカセム、ト云テ、 同、二十八、越前守爲守付六衛府

官人語、 心カラ、物ヲ惜ムデ、其達ニ、此ク被責申シテ、恥ヲ見トハ、何デカ

可思ヤ。 同、五十、白井君銀提入井被取語、 白井ノ君、此レヲ恠ムデ、寄テ

見ケレバ、云々、

童蒙頌韻、 罷ヤンデ、 致ツ、シンデ、 吞ノンデ、 蹂フンデ、 臨ノゾン

デ、 斟クンデ、

鎌倉時代

平家物語、一、二代后の事、 深淵にのぞんで、薄氷をふむにおなじ。 同、二、新

大納言ながされの事、 軍兵、前後左右をうちかこんで、 同、二、康頼のつ

との事、 つゝしんで、もつて、うやまつてまふす。 同、三、有王がしまくだ

大納言ながされの事、軍兵前後左右をうちかこんで、同二、康頼のつ

との事、つゝしんで、もつて、うやまつてまふす。同三、有王がしまくだりの事、白雲、あとをうづんで、ゆき來の道も、さだかならず。同三、醫師もんだうの事、恩愛のわかれ、家のすいび、かなしむでも、なをあまりあり。同五、朝てきそるへの事、鷲、云々、せんじぞ、とおほすれば、ひらん(平み)でとびさらす。同十二、判官都落の事、すみよしの神官、是をあはれんで、乗物共をしたてゝ、みな、京へぞおくりける。同十二、はせ六代の事、人のすんだる所とも見えず。

遊仙窟 徒倚、タゝズンデ、歩、アユンデ、啜々然、ホゝエンデ、惻愴、イタ
ンデ、

假名論語、述而篇 かならず、事にのぞんでおそり、はかりごとをこのんで、なさん物也。(必也、臨事而懼、好謀而成者也) ふばきをいつして、すゝんで、いわく、(揖巫馬期、而進之曰) 同、泰伯篇、つゝしんで、れいなきときんば、すなはちしす。(慎而無禮則蕙) 同、先進篇、なんぞ、かならずしも、しよをよんで、しかうしてのちに、まなぶことをせん。(何必讀書、然後爲學) 同、季氏篇、くるしんでまなぶるは、又、そのつぎなり。(困而學之、又其次也)

假名論語、憲問篇に、「まづしうして、うらみなきことはかたく、とつて、おごることなきはやすし。〔貧而無怨難、富而無驕易〕の「富みて」を、「とつて」としたわ、めずらしい。

室町時代

義經記、三、書寫山炎上の事、ゆん手のかいな、差しのべ、かうをつかんで、ゑいと引く。同、三、辨慶、洛中にて、人の太刀取し事、八尺の壁をふんで、天にあがりしを、同、三、義經、辨慶と、君臣のけいやくの事、ひいつ、すゝんづ、打合ひける間、同、三、頼朝謀叛の事、弓馬の名をうづむで、星霜をおくり給ふ。同、四、土佐房、義經の討手に上る事、土佐、つゝしんで申けるは、

曾我物語、一、おなじく、すまふの事、足をとりてみよ、組んでは、かなふまじきぞ。同、九、すけなりうち死の事、幕をつかんで投げあげ、御侍所にはしり入。

幸若、夜討曾我、太刀脇ばさんで、敵のやかたのけこを、靜に見て通る。同、和田酒盛、あらめづらしの御さかづきやと、もつて、三度ぞくんだりけ

る。さうちやうの藤が、松をからんで、同、劔讚歎、じゆず、さらくと

和田酒盛、あらめづらしの御さかづきやと、もつて、三度ぞくんだりけ

る。きうちやうの藤が、松をからんで、同、劔讚歎、じゆず、さらくと
おしもむで、同、烏帽子折、鬢の毛は、ちむむだり。

謠曲、大原御幸、二位殿、云々、ねり袴のそば、高くはさんで、云々、船ばたに臨
む。

孟子抄一、三〇 桀ヲ亡シタイト思フヤウニ悪ンデハ、何がタマラレウゾ。

同、一、三六 車ニ薪ヲツンデ、車輪ノ折ル、程ツンダ。同、五、二九 是カラ以
來、ツ、ンデ、捨ツ、ウツンヅ、ナンドスル事ガ始タゾ。

狂言記、栉山伏、栉を盗んで食らう山伏を、云々、同、伯母酒、酒、云々、とて
もの事に、ちと休んでたべう。

伊曾保物語、二三人程、立ちかゝり、忽ち打擲せうとするに臨んで、主人の
足元にひれふし、吃りく、つつしんで申すは、上に産んだか、下に産んだ
か、存せぬ。

江戸時代

醒睡笑、一、頭をくはせ、くんづ、ころんづ、臍次なかりつるが、
正章千句、九、初冬、落葉、奇麗に炭を、くんで出せり。

【二〇三】 動詞 頼んで 讀んだ等

小栗の判官、しみづの段、くんだるしみづをかたにかけ、

諸國盆踊唱歌、下總、どばし板なら、よかるもの、どんとふんでは、めをさます。

雑兵物語、上、鐵炮足輕小頭、どろのすんだ上水でも、すゝつて居なされ。

同、下、荷宰料、其繩をひつきざんで、水に入れ、こねまはせば、其上水のをんだがよい。同、下、若黨、手負振をたしなんで、弱みをみせまい。同、下、

草履取、鐵炮鞘の小尻へ入れ、その上へ、鐵炮をつゝ、こんだ所で、折ふし、すむばこがおこつて、細腹がいたんで、ねまつたれば、

雑兵物語、上、鐵炮足輕小頭の、半分づゝは、玉藥をこんだ、は、下二段活用
 のようであるが、やはり四段活用の他動である、近頃の文に、「飛んでも
 ない入閣を夢んで、などゝあるのを見たが、よろしくない。

○「み」を「う」と云つて居たもの、「ふ」と書いてあるのも「う」である

平安朝時代

梁塵秘抄、二、雜、聳の冠者の君、何色の何摺か、このうだう「好みたぶ」である、
 「たぶ」は「給ふ」と同じである（着まほしき）。

鎌倉時代

梁塵秘抄、二、雜、 智の冠者の君、何色の何摺か、このうたう(好みたふ)である。
「たぶ」は「給ふ」と同じである(着まほしき)。

鎌倉時代

平家物語、四、大衆そろへへの事、 風うへに、火をかけ、やきあげ、一もみもふ(揉み)で、せめんには、 同、五、くはんじん帳、 くはんじんちやうをひきひろげて、たからかにこそ、よふ(讀み)たりけれ。 同、九、忠度さいごの事、 六彌太をつかふ(握み)で、弓長ばかりぞ、なげのけらる。 同、十一、なすの輿一の事、 馬の左のむなかひつくしを、はずのかくる、程にぞ、いこう(射込み)だる。 残りの四騎は、馬をおしふ(惜み)で、かけず、けんぶつしてぞゐたりける。

室町時代

義經記、二、鬼一法眼の事、 頭巾、耳のきはまで、引こふ(込み)で、大手鋒を杖につき、 同、三、頼朝謀叛により、義經、奥州を出給ふ事、 御ざうしのらうどうには云々、三百よき、云々、もみにもう(ではせ上る。 同、五、忠信最後の事、 烏帽子引たて、をしよう(で、ぼんのくぼに引いれて、 幸若、小袖曾我、 おほくの人をほろぼし、あけにそふ(染み)だるうち物を、弓手の肩になげかけ、 同、烏帽子折、 不動明王、云々、劍をのう(呑み)だるところ、 同、馬ぞろゑ、 廻文をまはしたのふで見んとの御誕なり。

史記抄、二、一〇 隠括ハ、モノ、ユガウダヲタムル心ゾ。同、二、三八 カラ

カサノヤウナモノヲ、兩方ニハサウ(挾ミ)ダラバ、同、三、二三 御トモヲ

申サフトノゾウ(望ミ)デ從タゾ。同十一、七八 目攝トハ、ニラウ(瞰ミ)デ、

アレヲシタ、メウト、シタホドニ、同、十三、二一 少カラ、醫藥ヲコノウ

(好ミ)デ、シタレドモ、同、十四、八 鞠躬、云々、事ヲツ、シウ(慎ミ)ダル者ゾ。

孟子抄、一、二三 豚、云々、時失トハ、ハラウ(孕ミ)ダヲ殺スヲ云フ。同、二、六

天ノ正路ヲタノウ(頼ミ)デ居ゾ。同、三、七 惡政ニクルシウ(苦ミ)ダ民ヲ、

善政ヲ行ハ、

狂言記、墨塗、酒ばかり飲うで、小脇にきつと挾うで、同、萩大名、臍はぎ

の、延びての、かゝう(屈み)での、と仰らるゝ。私の頼うだ者が、同、太刀奪、

緩りとなぐさう(慰み)で歸らうぞ。同、花子、とろくゝとまどろうだれ

ば、鳥がかあかあと、夜が明けた。同、すね薑、片手で、なせ拜ましやる、い

や、兩手で拜うだも、片手も、心、同じ事でござる。

江戸時代

伊曾保物語、シヤント、怪しうで言はるゝは、

醒睡笑、四、これで、ざつとすう(濟み)だ。同、五、たゞ、よみたくば、歌よふ(詠

江戸時代

醒睡笑、四、これで、ざつとすう(濟み)だ。同、五、たゞ、よみたくば、歌よふ(詠み)で、同、五、いきしなには、つぼふ(苔み)だ花が、きしなには、忍じかつたりや、桶とぢの花。

小栗の判官、一、てるてふみの段、みづからよう(讀み)できかせんと、まづ文の紐をとき、

○「びて」を「んで」とも、「うで」とも云うようになったのわ、平安朝時代の末から見え、「みて」を「んで」と云うは、平安朝時代の早い時から始まり、「うで」と云うは、同じ時代の末から見えることは、右に挙げた例の通りである、此二つの言い方を見るに、動詞にも、時代の前後にも、何と認めるべき區別はないよう、で、假名論語に、「ゑらんで」「呼んで」「及んで」「喜んで」「幸若に」「えらんで」などとあるに、幸若に、又、「喜うで」とあり、史記抄に、「及うで」「孟子抄に」「擇ウデ」「狂言記に」「呼うで」「喜うで」「及うだ」とあるから、同時に、打ちませてつかつて居たようである、そうして、江戸時代になつて、「びて」も、「みて」も、どちらも「んで」の方に一定して、今でわ、全國、大抵、そくなつて、「うで」は、西國の方に、處々、少しばかり残つて居るのである。

○カ行四段活用の動詞の「行きて」「行きたり」に限つて、「いつて」「いつた」「たら」「たり」と

【二〇三】

動詞

頼うで

讀うだ

行つて

なつたわ、不思議である、是れは、室町時代からのようで、同時に、「いた」とつ
いめたものをませて、後には、「いた」とばかりになつた、今でも、畿内、西國で
は、そうであるが、東國では、「つた」である、是れは、「困りて」をよて」と云い、「以ち
て」を「もて」と云うと同じである、う、けれども、「いた」わ用いぬがよい、又「かよ
うになりゆいたのわ、心がらである、など、云うこともある。
○「行きて」行きたり」の「いつて」いつた」となつたもの、

室町時代

史記抄、四、七　ドコヘイツテモ、驕テ、人ヲアナドリテ、同、九、八　荆蠻ニ奔
テイツタホドニ、同、十、三九　其屬ヲツレテイツタゾ。同、十、五九　他
國ヘイツタナラバ、必アタヲナシテ、ワルカラウズ。同、十一、七七　イツ
ツ、カヘリツ、シタゾ。

○「いつて」「いつた」の「いて」「いた」となつたもの、

史記抄、六、二九　秦軍ノニグルヲ追テイツタゾ。同、六、三九　數千人デ、南
陽ヘイツタゾ。同、十六、一二　生ケドリテ、モツテ、イテ、ニガイテハ大事
ゾ。孟子抄、一、二六　穆公ノ、アノヨヘツレテイツテ、ツカワレウト云テ、

ニクンデシタゾ。山崎宗鑑辭世(天文中)宗鑑は、いづくへいたと、問

陽へイタゾ。同十六二三 生ケドリテ、モツテ、イテ、ニガイテハ大事
ゾ。孟子抄、一、二六 穆公ノ、アノヨヘツレテイテ、ツカワレウト云テ、

ニクンデシタゾ。山崎宗鑑辭世(天文中)宗鑑は、いづくへいたと、問
ふならば、用が出来たで、あの世へといへ。狂言記、靱猿、あれへいて、
御禮を申せ。同、墨塗、暇乞にいたものであらうか。同、伯母が酒、
早う出ていて下されい。同、右近左近、身共も行く、左近もいた。江
戸時代、醒睡笑、一、福は、よいから、よそへゐたものを、諸國盆踊唱歌、
大和、梅と、櫻と、よしのへいたら、梅はすいとて、もどされた。同、肥前、
おばごのかたへ、かたびら一枚、かりにいた。

【一〇五】 熟語で名詞となる事も多い、「読み切り」「勤め續き」などである、又一音
の動詞わ、多くは、熟語で名詞となる、「心得こころえ」「往來ゆきまき」「晴着はれぎ」「空似そらに」「花見はなみ」などがそれである。
○第二活用形を、「読み物」「落ち葉」などつかうのは、名詞形と名詞とが、熟語にな
つたのである、又、「泣き」話す「重ね」難儀するなどと云うのわ、動作の繰
返されるのを云うので、熟語となつて、變わつて、副詞となる、一音の時わ、「顔を
見い」挨拶するなどと、母韻を引く、又「懲り」する「延び」する「晴れ」
する「受身の助動詞に、追われ」して、使役の助動詞に、「讀ませ」する、「など
云うのわ、意味を深く云うので、する」と熟語となつて、動詞となる。

【一〇五】 動詞 第二第三活用の名詞となること

○又、第三活用形の名詞となることがある、古今集、春、上に「やよひに、うるふうるふ（閨）
月のありけるとし、よみける、陽炎かひろうふ「かざるひ」角力すまひ人の名などに、薰實かをらみのる
登渡のぼるわたる

【一〇六】 萬葉集、二、佐田の岡邊に侍宿為トホシに行く後撰集、春、上、君のみや、野邊に、
小松を、引きひにゆく、我もかたみに、つまむ若菜を。本を讀みわしたが、字を書
ききわせぬ、飯を食くいもしたり、茶を飲のみもしたり、

【一〇九】 すべて、文語の動詞、形容詞、助動詞の連體形を、口語には、終止形に用
いる、かようになつたのわ、いつ頃から始まつたか、平安朝時代の靈異記、上の
訓釋ニ「負、マクル」類聚名義抄に、「去、イヌル」皓、ヒノイズル「熟、ニユル」新撰字鏡に
吠、犬乃保由留ホユル鱒魚乃曾己禰太々禮留ササガニなど、連體形でも書いてあるが見える、
○連體形の、終止形となつたもの、

平安朝時代

今昔物語、廿六、下、觀視上人在俗時值盜人語、今ハ可コ教ニ、此ク遙ニ將行ハ、
何ト心モ不得思ユル、見返テ、恐々見レバ、云々、何なにの掛りを、連體形で結ん
だのでもあろうか、同、廿六、下、東小女與狗昨合互死語、此狗ノ爲ニ、被

昨クヒコ教ナントスル、病无クシテ、人ノ見時、云々、同、廿八、上、祇園別當感秀被

だのでもあろうか。同、廿六、下、東小女與狗咋合互死語、此狗ノ爲ニ、被

咋^{クヒコサ}敏^ナントスル、病无クシテ、人ノ見時、云々、同、廿八、上、祇園別當感秀被
行誦經語、良久ク、否尋子會ヒ不奉ズトテ、使返リ來ヌル、而ル間、云々、
同、三十、夫死女人後不嫁他夫語、祖亦他ノ夫ヲ合セムト爲ルニ、云々、父
ノ云ク、云々、尙合セムトスル、娘父母ニ云ク、云々、

寶物集、上、心ある人は、この世をば、さらに、うつゝとはおもはざるとなん。
同上、五百由旬のやまかゝちは、ちいさきむしのためにくはるゝ、蒼海
の魚は、くらきをいとひて、出離をもとめ、云々、同上、されば、ちくしや
うとは、生をたくはふるとかくなり。同、中、たとひ、人、われをころさむ
とするとも、われは、人にうらみをなすべからず、あたをば恩にて報ずる
といふ事あり。同、中、よろづの物を見て、ほしきと思ふ、云々、心に物を
あんじて、思ひ出し、ほしと思ふ。同、中、紫式部、そらごとをもつて、源氏
物語をつくりしゆへに、地ごくにおちて、苦患をうくる、はやく源氏をや
きすて、云々、同、中、かやうの事をも、しりながらも、酒をこのむものも
おほく侍る、よくくつゝし、しみ給ふべきなり。同、中、愚しやの作るつ
み、すくなけれども、地ごくにおつる、と弘法大師は仰ける也。同、中、只

【一〇六】

【一〇九】

動詞

連體形が終止形となつたこと

九二

今、鳥べ野へ、をくりまいらせぬるといふをき、云々、

鎌倉時代

平治物語、三、頼朝被_レ定_二遠流事、今日斬ル、明日失ハル、ナド聞ヘシカド
モ、其日モ、延ケレバ、云々、(下に、語を略したるものか)

平家物語、一、妓王の事、たとひ、みやこを出さるゝとも、云々、岩木のはざま
にてもすごさん。

古今著聞集、九、扱、頼光は、其より歸りける。

吾妻鏡、元暦二年、四月十五日、其氣ニテヤラン、是ハ、イタチニヲヅル。

砂石集、二、馬ヲヒカヘテ、物語スル、弋瀬河ニテ死ベカリシ身ノ、云々、同、
三、アハレ、マケヌルトキコユル人モ、云陳ジ申習ナルニ、云々、

室町時代

曾我物語、一、かはづの三郎うたれし事、天のあたへをとらざるは、かへつ
て、とがをうるといふ。

幸若、入鹿、諸卿残らず參内ある、鎌足、憚り御不參なり。同、百合若、御勢
は三十萬騎と記さるゝ、その外、以下のつはものども、云々、申さんとすれ

ば、泪落つる、申さずば、知召さるまじい。飯をまるめてそなふる、この鷹、

幸若入鹿、諸卿残らず參内ある鎌足憚り御不參なり。同百合若、御勢は三十萬騎と記さるゝ、その外、以下のつはものども、云々、申さんとすれ

ば、泪落つる、申さずば、知召さるまじい。飯をまるめてそなふる、この鷹嬉しげにて、飯をくはへ、云々、岩間に、鳥の羽、少し見ゆる、大臣、怪しく思召し、筑紫の博多に吹き着くる、ありがたしとも、なか／＼に、申すばかりもなかりけり。

幸若、敦盛、船を招き寄せうすものと思召し、同、和田酒盛、十郎がさゝうす男ならば、取て吞まうす、同、烏帽子折、太刀を取らせて行かうすか、史記抄、六、七〇、太后ノ喜マウズ、ホドニ、などは、却て、終止形を、連體形につかつたのである。

史記抄、十、五三、馬車ヤ、女ヤナンドガアル、ト云モ此心ゾ。同、十、七八、掠ハ、カスムル、トヨムゾ。

孟子抄、七、一四、一人ノ心得ガ悪ケレバ、内輪ガ破ル、ソコデ、他カラミカケテ、伐テトルゾ。

閑吟集、かわ柳は、水にもまるゝ、ふくら雀は、竹にもまるゝ、都の牛は、くるまにもまるゝ、野べの薄は、風にもまるゝ、茶うすは、引木にもまるゝ、げに、まこと忘れたりとよ。新茶のちやつばよ、なふ、いれてののちは、こちや

しらぬ、く。我おもひ、うちにある、色や、外に見えつ覽。

狂言記、宗論、同道致さうと存ずる。其方に、ちと意見をしたい事がある。

同、ひめ糊、六七騎にて追かくる。同、酢薑、いかにも、辛き物にて候、と

申上ぐる。同、伯母が酒、七つ過ると、いかめな鬼が出ます。同、生捕

鈴木、重家、こての繩を免し、云々御前にひきすゆる、又、其時、頼朝、云々、

同、地藏舞、あれに、火の光が見ゆる、さらば、あれへ行て、宿を取らう。同、

墨塗、身共は知らぬ。

江戸時代

徒然草抄、上、莊子等ヲ以テ書タル、トミヘタリ。

おきく物語、夫ゆえ、茂介妻の恩をば忘れぬ、と高虎申され候由、

醒睡笑、一、有時、行脚の比丘來るに、件の旨を語りきかする、即、我ゐてみん

といふ。彼聖、年月を経て後、頻に入定せんと披露する、各、涙を流して、名

殘ををしむ。人くらひ犬のある處へ、云々、虎といふ字を、手の内に書て

見すれば、くらはぬ、とをしゆる、後、犬を見、云云、同、四、歌の點を望みて

參らせあぐる、兎角、よろしからねば、云々、同、七、酒宴なかば、舞舞の出

たりし、上座より、其方は、なにがかりぞと問ふに、同、七、忍びて起出る、

小人、聞つた、後、

参らせあぐる、兎角、よろしからねば、云々、同七、酒宴なかば、舞舞の出

たりし、上座より、其方は、なにがかりぞと問ふに、同七、忍びて起出る、
小人、聞つけ、後より、そと行く。

戯言養氣集、お天神ぢやとて、うしろを、ほとほと打たれば、八幡なしそ、
しやだんが破るゝ、と云た、

あづまの道の記、熱田の宮に、古井あり、弘法ほられたるとなり、猶、其奥に、
清水あり、是は、本社の内より流れ出るとや。

東海道名所記、舞坂、誠に、世の中に、鬼はない物ぢやと、樂阿彌もかんにて
おる、されば、云々、

鎌倉時代以後わ、落つ受く寝來爲被などの終止形わ、殆ど、亡びたといつても
よいくらいで、すべて、連體形を用いて居る、殊に、江戸時代以後わ、落ちる受け
るねるれるなどとなつて、全く、連體形となつた、今でも、九州にわ、古い形で、落
つる受くるなど、云つて居る所もあるが、やはり、落つ受くわ、亡びて居る。

○文語の終止形わ、他動四段活用も解く、自動下二段活用も解く、自動四段活
用も立つ、他動下二段活用も立つであつたが、今の口語の終止形わ、他動に解
く、自動に解ける、自動に立つ、他動に立てるとなつて、區別わよくなつた、しか

し、終止も、連體も「解ける」立てるとなつたので、紛れる事が起つて、一得一失である。

○今の口語で、ワ行五段活用の動詞の語尾の上に、アの段の音のあるもの、終止形、連體形を、元のアの段の音のまゝに、「たゝかう」(戰)「やしなう」(養)「わらう」(笑)「はう」(這)「まう」(舞)などと云うわ、關東、奥羽、静岡縣であつて、愛知縣、山梨縣、長野縣、新潟縣、から西わ、九州までわ、アの段の音を、オの段の音に變へて、「たゝかう」やしの「う」わろ「う」ほ「う」も「う」と云うのをませてつかつて居り、其内に、「かう」な「う」ら「う」などとはかり云う所もあり、(京都、大阪わ、アの段の音である)又、「こう」の「う」ろ「う」などとはかり云う所もあり、又、稀には、終止形の時にわ、「かう」な「う」ら「う」と云い、連體形の時にわ、「こう」の「う」ろ「う」と云う所もある、今わ、全國に多い「かう」な「う」ら「う」などの方にきめた。

東國の方でも、武藏、群馬縣の處々、栃木縣の那須郡、足利郡の中部、并に、北海道の松前などに、「こう」の「う」ろ「う」と云ふ所があり、茨城縣、福島縣の平、會津、宮城縣、岩手縣にわ、兩方ませて云つて居る所もある。

又、千葉縣の海上、安房二郡、福島縣の白河、二本松、福島、相馬、島根縣の仁多郡

などに、「かあ」な「あ」ら「あ」などゝ云う所もある。

城縣岩手縣にわ兩方まで云々一居一居
又、千葉縣の海上、安房二郡、福島縣の白河、二本松、福島、相馬、島根縣の仁多郡

などに、「かあ」「なあ」「らあ」など、云う所もある。

但し、第二活用形を「てた」に續ける時わ、關西でわ、一般に「た」こうて「やしのうた」わろうて「ほうて」もうた」と云い、關東でわ「た」か「つて」やしな「つた」わら「つて」は「つて」ま「つた」など、云う。(此遷りかわりの事わ、前の五段活用の「てた」につづく所(一〇三)で説いた)

【一一〇】連體形わ、重ねても用いられる、「食のす」「む力のつく」「藥、雨の降る路のぬかる日」

【一一四】前に、第何活用形わ、助動詞の何に續くと云つて、其助動詞の意味わ、助動詞の處で、説くことにしてあるから、こゝの第四活用形も、助詞の「ば」に續くとばかりで、其意味わ、助詞の「ば」の處で説く筈であるが、其意味わ、動詞と「ば」と續いた上で出來るのであるから、こゝわ、少し異例となる。

【一一五】【一一六】【一一七】既に定まつた意味に云ふにわ、「思えば」「悔しい」「見れば」まだ年の若い人、年わいくつかと聞けば、十五と答えた、など、も云う、又、「一同でした事であれば」、一人の功でわない、「先生であれば」こそ、敬うのである、「などわ」「故に」の意味ともなり、「親があれば」「子がある」「一人がよいと云えば」、

【一一〇】…【一一七】 動詞 第四活用形の意味

一人が悪いと云う、などわ、既に定まつた意味にも、故に「の」意味にも、事柄を並べる意味にも取られる。

文語でわ、動詞の各種活用の第一活用形に、「書かば」「落ちば」「受けば」「來ば」「せば」「助動詞の中にも、こうなるのがある」と「ば」を附けて、將然の意味に云うが、口語にわ「亡びて」「稀に」「毒食はば」「皿まで」「殺さば」「殺せ言はば」「何々申さば」「かようく」など、云うわ、文語の姿の残つて居るのである、第四活用形に「ば」を附けた已然の形を、將然の意味にも已然の意味にも用いる、但し、形容詞、助動詞に稀に用いる「無くば」「嬉しくば」「行きたくば」「來なくば」「無ければ」「嬉しければ」「行きたければ」「來なければ」に對する、助動詞の「たらば」「ならば」などわ、文語の將然の面影である。

「書けば」「落ちれば」「受ければ」「來れば」「すれば」などを「かきやあ」「おちりやあ」「うけりやあ」「くりやあ」「すりやあ」「など」も云うが、言葉が下品に聞えるから、用いぬがよい。形容詞の「善ければ」「嬉しければ」、助動詞の「讀まれば」「書かせれば」「見なければ」「行かなければ」、接尾辭の「男らしければ」「などを」「けりやあ」「れりやあ」「せりやあ」「など」も云うも同じである。

【一一八】 未來形、推量形わ、それ／＼の意味を云つて、終止形となる。

文語の四段活用で、未來、推量の意味を云うにわ、「書かむ」「指さむ」「立たむ」「言はむ」

やあれりやあせりやあなどとも云うも同じである。

【一一八】 未來形、推量形わ、それぐの意味を云つて、終止形となる。

文語の四段活用で、未來、推量の意味を云うにわ、書かむ指さむ立たむ言はむなど云うを、今の口語でわ、かこうさそうたとういおうと云うこと、全國、大抵その通りである、(京都大阪邊でわ、未來に「書こう指そう、推量に「書くやろう指すやろう」と言分ける)、「むの子音がなくなつて、母韻の「うばかりとなつたので、次の上一段、下一段活用、カ行變格、サ行變格活用、受身使役等の助動詞のも、同様である。

稀にわ、あらむ限りの力を出して、「此世のあらむ限りわ云々、」など云ふこともある。

武藏の處々、岡山縣の赤磐郡、宮崎縣の處々に「かかうささう」と云う所があり、三河、出雲の處々に「かかあささあ」と云う所があり、山形縣の東田川郡、富山縣、福井縣、岐阜縣、滋賀縣、三重縣の南部、京都、大坂、丹波、兵庫縣、宮崎縣の處々に「かこさそ」とばかり云う所があり、島根縣の簸川郡に「かかささ」とばかり云う所がある、第二の音まで「かさ」と云うわ、文語の音の残つて居るのである。

○「むの、うとなつたもの、(「ふ」とあるのも「う」である)

【一一八】 動詞 五段活用の未來形推量形

平安朝時代

四段活用の未來、推量を、音便に云うようになつた起りわ、源氏物語の竹川に、「はぢらひておはさうずる、いとをかしげなり」。同、檣柱に、「うちひそみて、なきおはさうず」。大鏡の序に、「いさ給へ、むかし物語して、此おはさう人々に、云々、きかせ奉らん。などで、「おはさうずる」「わ」「おはさむずる」「おはす」と云う動詞に、四段活用のものがある、と見て云う、の音便である、是れは、竹取物語に、「さる所へまからむずるも、いみじくも侍らず。などから變わつたもので、「罷らむとす」「おはさむとす」「を約めて、音便に濁らせたのである。

鎌倉時代

平家物語、二、少將こひうけの事、しばらく、少將をあづからうと申に、云々、同、二、教訓の事、胸板の金物、すこしはづれて見えけるを、かくさうと、しきりに衣をひきちがへ、同、四、競の事、まつさきかけて、いのちを奉らう、ところ存せしかど、同、七、實盛最後の事、名乗れ聞かう。「寄れ組まう」「わかやがうと思ふなり。

室町時代

曾我物語、おなじくさかもりの事、年よろふ人のさかづき、云々、たき口殿

室町時代

う わかやがうと思ふなり。

曾我物語、おなじくさかもりの事、年よろふ人のさかづき、云々、たき口殿
よりははじめよ。

幸若、百合若、助けて、さらば、戻らうずるか。同、烏帽子折、太刀を取らせ
て行かうずか。

史記抄、五、二〇 義理ヲ云ワウトスレバ、云々、同、五、二三 大ハヂヲカ、
ウゾ。同、六、二四 餘人ノ、沛ノ主ニナラウト云モノガナイゾ。

孟子抄、一、五 後代ニ、名ヲノコス事ヲシテヲカウ、ト云心ゾ。同、一、一四 我
家ヲ取ヲイテ、人ノ家ヲトラウトシ、

閑吟集、なるこをかけて、花のとりおはう。わごれうは、かへらうか。

狂言記、釣狐、いそいで參らう。何しに偽り申さうぞ。同、宗論、身延參
りをいたさうと存ずる。夫れがようござらう。

伊曾保物語、宛がはうずと思定め、同、大きな荷があつたを、エソポ、こ
れを持たうといへば、そちを買はうと思ふが、何とあらうぞ。

江戸時代

昨日は今日の物語、よきむすめをもつ、よき所へきもをいらふ、といへば、

いかほどの身上ぞ。

徒然草抄、上、イカヤウニ、ソシリワルクイハウトモ、クルシカラヌ也。

醒睡笑、一、江州六角佐佐木四郎と、三好家と、とりあひ、云々、時に、世の中を

しらふく(知、四郎)といひけれど、云々、其代りに、われが仁王經をよま
ふぞよ。

犬子集、二、春、下、櫻 心ぼそや、ちらふとおもふいと櫻。

吾吟我集、九、こゝも又、それといわうが、島なれや、數のそとばを、波になが
せば。

正章千句、二、花、雨と露、ばかりで花が、ひらかふか。

東海道名所記、水口、ひらにとまらせられい、鱈汁をいたさうか。

諸國盆踊唱歌、播磨、かみをしまだに、いはうよりおかた、心しまだに、もち
なされ。

末の「うなしで云つたものわ、狂言記、相合袴に、案内をかを(請はう)物も、
(物もうそう)お案内、これが一段でござる。同、烏帽子折に、まづ、烏帽子
を持つて、いそいでまゐる。同、釣り女に、釣ろよく、おかつさま釣ろ

よ。諸國盆踊唱歌、伊豆に、じつにそふなら、なまづめはなそ、おれは五

(物もうそう)お案内、これが一段でござる。同、烏帽子折に「まづ、烏帽子
を持つて、いそいでまゐる」。同、釣り女に「釣るよ〜、おかつさま釣る

よ。諸國益踊唱歌、伊豆に「じつにそふなら、なまづめはなそ、おれは五
つのゆびをきろ」。同、阿波に「雨がふるとて、おきからくもる、むすめさ
ろとて、むこがこぬ」。淋敷座の慰、のほ〜んぶしに「戀てしんきや、身は
かげろうの、いつかめぐりて、君にあを」。などと見える、今も、滋賀縣、京都、
大坂、兵庫縣あたりで「書こ指そ」と云つて居ると云う事わ、前に云つて
おいた。

○文語のナ行變格活用の「死なむ往なむ」を、口語に「死のう往のう」と云うわ、全
國、皆、同じである。

室町時代

史記抄、十、三 老子ノ、イナウトセラル、ゾ。同、十一、二九 民百姓ハ、上ヲ

ハナレテイナウゾ。同、十一、五三 思キリテ死ナウトスルハ、勇ナリ。

同、十一、九八 死ナバ、我モ死ナウ、生キバ、我モ生キウズ。

孟子抄、八、一七 死ナウ處デハ死ナヌ、死ヌルマイ處デ死ヌレバ、惡ゾ。同、

九、二四 ソコデ、イナウトテ、隠レテ、微服ト云テ、キタナイ服デ、イナレタゾ。

狂言記、釣り女、めん〜に、脊せなかに負ふていなう。同、文山たち、書置をし

【二一八】 動詞 五段活用の未來形推量形

て、死なう^{||}ではあるまいか。同、附子、附子を喰うて死なう^{||}と思つて、

江戸時代

醒睡笑、七、かつる死なう^{||}かと思ひ、ふびんさに、泣いたよ。同、七、まちと、

こらへられたらば、殺さずとも、かたきが死なう^{||}ものを。

西翁十百韻、岩城にて、花の陰、宿をかさずば、出ていなう^{||}。

松の葉、一、葉手、まつにござつた、いとしのきみや、のう、こんやござらざ、こ

がれしのう^{||}。

○ラ行變格活用の「あらむ^{||}居らむ^{||}を^{||}あろう^{||}おろう^{||}」と云うわ、全國の口語、すべて、同じである。

室町時代

幸若、信田、承る事も、ありあらう^{||}ず。

史記抄、四、三九 上ニアラウ^{||}ズ勢ハ、下ニクダリ、同、六、四七 サアラウ^{||}ニ

ハ、ナントセウゾ。

孟子抄、一、三 機ヲ截テステ、此如クニアラウ^{||}ゾ、男子ノ學問セヌハ、ト云

タゾ。

狂言記、宗論、何と、聞いた事があらう^{||}。同、相合袴、あまが崎から、聲が來

るやら、かさをさいて居らう^{||}ぞ。

孟子抄、一、三 機ヲ截テステ、此如クニアラウゾ、男子ノ學問セヌハ、ト云
タゾ。

狂言記、宗論、何と聞いた事があらう。同、相合袴、あまが崎から、聲が來
るやら、かさをさいて居らうぞ。

狂言記の二千石に、「しざり居る、夫へ出て聞き居る、など、」うを約めて
云つたのも見える、但し、是れは、命令につかつたのである。

伊曾保物語、其咎めのあらうする時は、「何の仔細があらうぞ。」

江戸時代

醒睡笑、二、そち體さへ、知りたるゑびを、我が知らいでをらふか。同、五、

あの松は、男松であらふか、妻松であらふか。

西鶴五百韻、あの松原に、寺があらふか。

好色五人女、五、金銀も持あまつて迷惑、是は、なんとしたものであらふ。

雑兵物語、下、玉箱持、夫を證據にするであらふ。

○文語でわ、上二段活用の未來、推量を、「起きむ」「落ちむ」と云うを、口語でわ、東國、
松前、一圓から、西わ、播磨、但馬、和歌山縣、香川縣、あたりまで、大抵、「起きよう」「落ち
よう」と云い、(京都、大阪も、そうである)丹波、徳島縣、愛媛縣でわ、「起きよう」「落ちよ
う」に、「起きよう」「落ちよう」をませ、高知縣では、「起きゅう」「落ちゅう」をませ、岡山縣

鳥取縣から西は、山口縣まで、「起きゅう」「落ちゅう」で、尙「起きょう」「落ちょう」「起きょう」「落ちょう」をませ、(島根縣)九州わ、大抵「起きゅう」「落ちゅう」で、稀に「起きょう」「落ちょう」(佐賀縣處々、宮崎縣處々)、「起きょう」「落ちょう」(福岡市)をませて、つかつて居る、今は「起きょう」「落ちょう」に定めた。

和泉に「強ゆう」「試みゆう」など云う所がある。

尾張、岐阜縣、福井縣、丹波に「起きよ」「落ちよ」など云う所があり、富山縣に「起きよ」「落ちよ」と云う所があり、富山縣、三重縣の南部、京都、大坂、丹波に「起きよ」「落ちよ」「命令と同じであるが、アクセントがちがう」など云い、宮崎縣に「起きゆ」「落ちゆ」など云い、又、山形縣の庄内、越後、佐賀縣に「起きろう」「落ちろう」と云い、美作に「強いろう」などと云う所がある。

鎌倉時代

延慶本平家物語、二、石橋合戰事、股野ハ、云々、下ニナル、云々、ヲキフ〜トシケレドモ、佐奈多、上ニ乗居タリケレバ、叶ワジトヤ思ケム、云々、

室町時代

幸若、鳥帽子折、一期のうちを、らく〜と過ぎうずる事の嬉しさ、

幸若、烏帽子折、一期のうちを、らく／＼と過ぎうずる事の嬉しさ、

史記抄、三、二四 死デ、以前ノナサケニムクユウズルゾ。同、四、三九 上ニ

アラウズ勢ハ、下ニクダリ、黨與ガ、下ニデキウゾ。〔デコウ〕ともある、次の

カ行變格活用の未來、推量の處を見よ、同、七、二 其人モ、骨モ、朽チウズ

ルゾ。同、十、七二 齊へ深入ラント思ドモ、云々、韓魏ガ、ウシロヅメヲカ

セウズラウト思テ、ヲヂウ〔怖〕ゾ。同、十、七九 木へ上テ、ヲリウカ、上ラウ

カト、二端ノ心ノアルモノヂヤゾ。同、十一、九八 死ナバ、我モ死ナウ、生

キバ、我モ生キウズ。

孟子抄、五、一八 ソレヲ一人シテセバ、只、天下ハ何トシテスギウゾ。

狂言記、抜殻に、「酒、云々、も一つ喫たんませう、過ぎたすげうがな」と、「過ぎたう」を

過ぎたう」と云つてあるわ、中國邊で、「落ちたう」を「落ちたよう」とも云うと同

じである。

江戸時代

醒睡笑、六 物を、いかにも、ちとづゝくれらるゝ、おほくくふたらば、喉のどにろ

ができうか、とおもうてやら、

○文語の上一段活用でわ、未來推量を云うに、「着きむ」「見みむ」など云うを、今の口語

【二一八】 動詞 上一段活用の未來形推量形

でわ、東國、松前、一圓から、西わ、播磨、但馬、四國、一圓まで、「着よう見よう」と云い、(京都も、大坂も、そうである)岡山縣、鳥取縣から西わ、山口縣までわ、「きゅうみゅう」で、稀に「着よう見よう」きょうみょうをませて云い、(島根縣)九州わ、大抵「きゅうみゅう」で、稀に「着よう見よう」福岡市、小倉市、佐賀縣處々、宮崎縣處々をませてつかつて居る、今わ、「着よう見よう」にきめた。

富山縣にも、「射う着う」又わ、「きょうみょう」と云う所がある。

三重縣の南部、和歌山縣の新宮、丹波に、「着よ見よ」命令と同じである、と云う所があり、青森縣、山形縣の庄内、越後、筑前、佐賀縣、熊本縣、大分縣、宮崎縣に、「着ろう見ろう」と云う所があり、又、宮崎縣、鹿兒島縣に、「着ろ見ろ」とばかり云う所もある。

室町時代

幸若、烏帽子折、この冠者が着うずる烏帽子は、同、和田酒盛、座には、云々、九十三騎、くるま座に、はらりと居ながれ、すけなりがゐらうずるざしきはなし。

史記抄、十、七三 東周ニ、ヒツコウデ、イウ(居む)ズホドニ、同、十二、一〇 思

案シテミウト云ゾ。

孟子抄、二、一〇 孟子ヲミフト志ス者多ケレ共、同、四、一七 以フズ事デ

はなし。

史記抄十、七三

東周二、ヒツコウデ、イウ(居む)ズホドニ、同十二、一〇 思

案シテミウト云ゾ。

孟子抄、一、一〇 孟子ヲミフト志ス者多ケレ共、同四、一七 似フズ事デ

モナイ。

閑吟集、ふて、一度いふて見う、いやならば、われもたゞ、それを限り、
狂言記、釣狐、そと見うと存ずる。

江戸時代

昨日は今日の物語、さらば、それを見う、とおほせければ、
醒睡笑、八、 鮎、眉目よし、ま一度、顔見う、と世話にいふ。

○文語の下二段活用の未來推量の「受けむ」「捨てむ」を、口語でわ、東國、一圓から、
西わ、畿内、和歌山縣、播磨、但馬あたりまで、大抵「受けよう」「捨てよう」と云い、佐渡、
富山縣、石川縣、福井縣、岐阜縣、愛知縣、和歌山縣の一部、丹波、丹後、四國でわ、「受け
よう」「捨てよう」と「受けよう」「捨てよう」がまざつて居り、京都わ、「受けよう」で、大坂
わ、二つまざる、岡山縣、鳥取縣から西わ、専ら、「受けよう」「捨てよう」で、稀に、「受けよ
う」「捨てよう」がまざる、(島根縣)九州でわ、「受けよう」「捨てよう」で、稀に、「受けよう」「捨
てよう」(佐賀縣處々、宮崎縣處々)「受けよう」「捨てよう」(福岡市、大分縣の一部、宮

崎縣の西臼杵郡がまざる、今わ「受けよう」捨てよう」に一定した。

福井縣、丹波に「受きよ」など云う所があり、三重縣の南部、山城、丹波、和歌山の
新宮に「受けよ」捨てよ」命令と同じである、など云い、宮崎縣に「受きよ」兼に「
など云い、山形縣の庄内、越後に「受けろ」捨てろ」など云う所がある。

平安朝時代

源氏物語の若菜、上に「ねうく」といとならうたげになれば、云々」とある、「ねう
く」わ、猫の聲である、同じ若菜、下に「戀わぶる、人の形見と、手ならせば、なれ
よ何とて、なくねなるらむ」とある歌を、契沖阿闍梨が「人ノ形見トテ、手ナラ
セバ、吾心知リガホニ、汝ヨ、何トテ、寐ウくトハナクゾト、思フ人ノ、吾ト寐
ント云ヤウニ聞ナセル也、なくねなるらむ、トイフニ、意ヲツクベシ」と解い
た、此頃にもう「寐む」を「ねう」とも變えて云つたのである、木工權頭爲忠朝臣
家百首の中の源賴政の歌と見える、纔見戀の「猫の緒に、かゝりし簾の、はさ
まより、ほのみし人を、ねう」とこそ思へ」と云う歌の「ねう」も「寐む」で、猫の聲に
言ひかけたのである、數年前、京都の建仁寺中から掘出した、經筒か何かの
中から出た極樂願往生歌四十七首わ、以呂波四十七字を歌毎に、首尾に置

いて詠んだもので、片假名書きで、末に「康治元年壬戌六月廿一日壬午日」近

言ひかけたのである、數年前、京都の建仁寺中から堀出した經筒か何かの
中から出た極樂願往生歌四十七首、以呂波四十七字を歌毎に、首尾に置

いて詠んだもので、片假名書きで、末に「康治元年壬戌六月廿一日壬午日」近
衛天皇御宇」とある、其中に、「ウシヤウシ、イトヘヤイトヘ、カリソメノ、カリノ
ヤドリヲ、イツカワカレウ」とある歌、首尾に、「う」の字のある歌で、此末の「ワ
カレウ」わ、別れむの變わつたものである。

鎌倉時代

平家物語、二、西光がきられの事、當家かたぶけふとするむほんのともが
ら、同、二、教訓の事、これへまれ、御幸をなしまいらせう、とは候へども、
同、五、五節のさたの事、惡盜二人、にげこもりたりしを、よつてからめふ、
と申もの、一人も候はざりしに、同、九、一二のかけの事、西の手へ寄て、
一の谷の、まつさきかけうといひければ、同、十二、土佐房切られの事、
津の國、渡邊にて、逆艦、立てふ立てまじ、の論をして云々、

平家物語、七、實盛最後の事に、寄れ、組まう、手塚、とて、はせならぶる所に、
手塚がらうどう、主をうたせじ、と中にへたゞり、齋藤別當にをしなら
べて、むすつくむ、齋藤別當、あつはれ、己れは、日本一の剛がうの者と、くむで
うすよなうれとて、我が乗りける鞍のまへわに、をし付て、ちつともは

たらかさず」とある中の「くむでうすよなうれわ、解しがたい語としてあるが、真字本平家物語（木村正辭藏）七、にわ、己組日本一甲者汝等、よなわ、感動詞、うれわ己ノ轉、人ヲ賤メテ呼ブ語、神武紀、六、爾、此云飲例と書いてある、組みてが組んでとなりてむがでうとなつたのである。

古今著聞集、十九、 かいもちる、くれうといへば、云々、

室町時代

義經記、ころも川合戦の事、 あづまのかたのやつばらに、手なみの程をみせてくれうす。

幸若、鞍馬出、 その馬を捨て、御通候へ、あつたら馬を捨てうより、やあ、下りて引け、との御誕なり。 同、烏帽子折、 烏帽子、云々、やがて、折つて參らせう。 御身が名をば、京藤太とつけうぞや。 汝が牛には、草を蒔りてかけうぞ。 盗人どもが、云々、夕去の八つの比に寄せうぞ。 きやつばらは、掾の下に隠れうぞ。

史記抄、三、三三 涯分、扶持ヲクソヨウナンド、云フ。 同、四、五八 秦ノ地ヲ全シテ、フマエウゾ。 同、四、六一 一ツニナツテ、秦ヲヨワメウトスル

ゾ。 同、四、六四 六國ト云ハ、ドレノデアラウゾ、六國ニ、ドレヲソナヘ

史記抄、三、三三 涯分、扶持ヲクソヨウナンド、云フ。同、四、五八 秦ノ地
ヲ全シテ、フマエウゾ。同、四、六一 一ツニナツテ、秦ヲヨワメウトスル

ゾ。同、四、六四 六國ト云ハ、ドレノデアラウゾ、六國ニ、ドレヲソナヘ
ウゾ。同、五、三一 楚ハ破レウトスルカ。同、六、一一 皆焼テ失セウゾ。
同、六、一三 責メウトモセヌゾ。

孟子抄、一、二 何トシテ義理ヲツケウゾ。同、一、六 行迹ノ高キ事ハ、天ノ
浮雲ニモタクラベウゾ。同、一、三〇 何トシテガナ、百姓ヲタスケウト
思フ心ガ有タゾ。同、二、一六 其様ナ無道ナ物トハ、中ヲタガウテ、ステ
ウマデゾ。同、三、三八 善ヲ勸メウ爲デハアルマイ。

閑吟集 いとおしがられて、あとにねうより、にくまれ申て、おそくねう。

狂言記、鞆猿、どれへぞ、野遊山に出うと存ずる。同、宗論、廿日、三十日、手
間も取れうも知れぬ。先へも行かぬ黑豆を數へうより、愚僧が弟子に
ならしめ。同、萩大名、御意なうても、申上げうと存ずる所に、一段でご
ざりませう。いかほども褒めうもの、夫れならば、御目に掛けうほど
に、かう御通りなされい。同、ひめ糊 此度、折檻の加へうすれども、かさ
ねて折檻の加へうする。

伊曾保物語、わが腹中をひるがへいて、御目にかけて。あれこそ、其熟柿

をばたべたれとはねかけうするに、買うてから後に逃げうと思ふは、何と、

江戸時代

昨日は今日の物語、大なゆ(大地震)がゆりまして、御きもつぶれうと申、なんばんかうやく、云々、其かうやく、申うけう。

飛驒組(慶長三絃組唄) 明日は出うずもの、舟が出うずもの、思たげもなく、

お寝る殿御よ。

醒睡笑、二、此ぞうすいに、胡椒はいらぬか、それならば、ちとたべうと、同、

六、くふて、ひだるさをわすれう。同、六、聲の高きに、目がさめうずらう。

正章千句、七夕、若後家も是非たてふとや、おもふらん。

小栗の判官、せみやうの段、おぐり殿、云々、鬼かげが、のせふ(乗)けしきと、見

えてけり。同、三、かつべきいくさに、まけふでなし。

諸國盆踊唱歌、越前、相生みよより、かいじやうみやれ、こびんなでふ(撫)よ

り、櫃なでふ。

後撰夷曲集、七、題知らず、子をすてふ、我身は若き後家なれば、同、九、曉鶏、

諸國盆踊唱歌、越前、相生みよより、かいじやうみやれ、こびんなでふ(撫)よ
り、櫃なでふ。

後撰夷曲集、七、題知らず、子をすてふ、我身は若き後家なれば、同、九、曉鷄、
はたくと、關の戸ならぬ、羽をたゝき、こゝあけうよと、鳴か庭鳥。

鹿の卷筆、一、筆屋のじゆりやう、そなたの名は、つぎのぶとつけうとて、

松の葉、一、葉手、はでかたばち、われらも、さまにやつれ、いのちすてうすもの。

松の葉、二、長歌、さんやをどり、きみがねみだれがみを、いつかわすり
よぞ。

○文語のカ行變格活用の「來む」を、關東、奥羽、静岡縣、山梨縣、長野縣の口語にわ、
大抵、「こよう」と云い、尙、尾張、岐阜縣、京都府、奈良縣、大阪府の豊能郡、島根縣の簸
川郡、佐賀縣、宮崎縣の處々にも、そう云う所があり、又、武藏、群馬縣、栃木縣、茨城
縣、福島縣、山形縣、青森縣、松前、山梨縣、長野縣、遠江、尾張の津島、岐阜縣、京都府の
綴喜郡、河内、香川縣、大分縣、宮崎縣の處々に、「きよう」と云う所があり、又、武藏の
入間郡、群馬縣の新田郡、山形縣の庄内、西田川郡、飽海郡、新潟縣、それから、富山
縣、石川縣、福井縣、滋賀縣、愛知縣から西わ、中國、四國の處々に、「こう」と云う所が
あり、(京都わ「こう」で、大坂わ「こう」きよう)九州でも、福岡縣、熊本縣、大分縣、宮崎縣
に、そう云う所がある、しかし、命令にも、未來、推量にも、「こう」と云う所があつて、

紛れやすくもあるし、上一段、下一段活用と、語路を一つにして、今わ、「こよう」に決めた。

未來、推量にも、命令にも、「こう」と云う所わ、越後の處々、富山縣、石川縣、福井縣、滋賀縣の蒲生郡、京都府の船井郡、和歌山市、攝津の東成郡、岡山縣の都窪郡、香川縣の高松市、香川郡、仲多度郡、高知縣にある。
佐賀縣、長崎縣、筑後、熊本縣、大分縣、宮崎縣にわ、未來推量に、「くう」と云う所があり、鹿兒島縣でわ、「きゅう」又わ、「くう」である。

室町時代

幸若、烏帽子折、來^こう^うずる八月十五日に、宇佐八幡の御前にて、御放生會と申す事を執行はせ給ふべし。同、文覺、來^こう^うずるかた八十日、過にしかた八十日を占はせ給へば、云々、

史記抄、六、四九、イカニ、天子ハ尊ト云ヘドモ、父ガナウテハ、ドコカラデコウゾ。(「デキウ」ともある、前の上二段活用の未來推量の所を見よ) 同、十、三一、ヤミノ夜ニ、馬陵ヘコウゾト知タリ。

孟子抄、八、八、人ノ惡事ヲ、アナグリ求テ云ハ、後ニ、惡イ事ガデコウゾ。同、

八、一七、師匠ノ罪ハ、何カ有ゾ、後ノ惡ノデコウハ、兼テハ知レテコソト思

三ーヤミノ夜ニ、馬陵へコウズト知タリ。

孟子抄、八、八 人ノ惡事ヲ、アナグリ求テ云ハ、後ニ、惡イ事ガデコウゾ。同、

八、一七 師匠ノ罪ハ、何カ有ゾ、後ノ惡ノデコウハ、兼テハ知レテコソト思フゾ。

狂言記、花子、 雨の降る夜に、誰が濡れて來うすらう。

江戸時代

古今夷曲集、九、 いかになて、起る朝のへんがへぞ、昨日はこふと、今日はこまひと。

西鶴五百韻、 朝顔のはなのすけさま、貫てこう。

○文語のサ行變格活用の「爲む」を、口語で、「しゅう」と云うわ、静岡縣、山梨縣、長野縣、越後から東一圓で、尙、愛知縣、岐阜縣、三重縣、滋賀縣、富山縣、山城、丹波、奈良縣、和歌山縣、河内、和泉、攝津の豊能郡、兵庫縣、島根縣、香川縣、佐賀縣、宮崎縣の處々にもある、又「しゅう」と云うわ、愛知縣、岐阜縣、富山縣から西、京都も、大坂も、「しゅう」である、中國、四國まで、尙九州の筑前、大分縣、宮崎縣にもある、其外の九州わ、大抵「しゅう」と云う、今わ「しゅう」に定めた、上一段、下一段、カ行變格活用と、語路が一つにもなる。

東京でも、「どうしゅう、こうしゅう、何としゅう、しゅうことなし」など、わ

【二一八】

動詞 サ行變格活用の未來形推量形

云う。

武藏、群馬縣の處々、山形縣の飽海郡にも、「しよ」と云う所がある。

山形縣の庄内に、「そ又わ、そう」と云い、愛知縣、岐阜縣に、「せよう」と云う所があり、滋賀縣の愛知郡と、膳所に、「しよ」と云い、鹿兒島縣に、「しよ」と云う所があり、三河の西尾でわ、「しろう」と云う。

平安朝時代

和泉式部續集、上の歌の題に、「おとせうといひたる人のおとせねば」とあるわ、(丹鶴叢書)「おとせむ」の音便で、これらが、古く、物に見えるものであろう、源俊賴の散木奇歌集の十、雜、下、隱題の中の拾遺抄(しふるせう)の題の「しとねには、しういせうとぞ、思ひつる、したり顔にも、積る花かな」とある歌を、松屋筆記の七十一に解いて、「小兒に、小便をせさするに、シイヲセヨと云ふ俗語あり、此歌は、下根を通はして、しとねといひ、それに、尿管をよせ、しふるせうに尿せんといふよしをよせ、したり顔に、尿をしたりがほとよせたる也、尿をしふるといへるは、その尿するおとの、シエウといへば也、然て、シイヲスルなどいふも、これ也、シトといふも、尿管をしと、垂出す音よりいへる名也、

古くは、シトといひ、さて轉りては、シフキともき、シイともき、くは、その垂

をしふるといへるは、その尿するおとの、シユウといへば也、然て、シイヲスルなどいふも、これ也、シトといふも、尿をしと、垂出す音よりいへる名也、古くは、シトといひ、さて轉りては、シフキともき、シイともきくは、その垂出す音によれる也、花木の下根に立よりて、尿をせんとおもひつるには、やくもしたり顔に、花がちりつとりたるよしの歌也」とある、これも「せむ」を「せう」と云つたのである。

室町時代

義經記、忠信吉野山の合戦の事、中差參らせて、現世の名聞とぞんせうするに、云々、

幸若、烏帽子折、末世の衆生を罰せうするにて候。同、富樫、勸進をせうする聖が、勸進帳持では、如何候べき。

史記抄、五、二三 天下ヲバ、并吞セウトハ思フ上ニ、同、六、二三 ナントシ

テ、權柄ヲ專ニセウゾ。同、六、二七 秦ノ地ヲコソ、略セウズレ。同、六、四四

士卒ノ心ヲ安ゼウタメニ、同、七、一四 王者ガ、利ヲ本ニセバ、大夫モ、又、

家中ニ、何トカ利ヲセウトセウゾ。

孟子抄、七、七 何ヲ手本ニセウゾナレバ、堯舜ヲ手本ニセウゾ。同、十二、一八

王者ノ出ラレタラバ、必、魯國ハ、如昔成ウ程ニ、損ゼウゾト、下心ニ思テ、損

ゼウ歟、益セウカト問ル、ゾ。

閑吟集 扇のかげで、目をとろめかす、ぬしあるをれを、何とかしようかし、
ようかくしろう。

狂言記、宗論、御齋咄をせうより、法文を説かしめ。同、相合袴、盃、云々、さ
らば、聳殿に進せう。同、鞍馬參、夜前、宿坊へ寄らなんだに因て、直に下
向せう。

伊曾保物語、身が賞翫せうと思切つて居た其熟柿をば、

江戸時代

昨日は今日の物語、つえにせう、はしらにせうと申され、

醒睡笑、五、にくいやつかな、あいつに、今度から、せうやうがある、とたくみ、

正章千句、七、自害をせうとすれども、えもせず。

後撰夷曲集、九、我心、鬼のこぬ間に、せんたくせう、欲垢ありて、隠れ期はう
し。

西翁十百韻、獨吟、花ちらす、志賀の山風、何とせう。

諸國盆踊唱歌、和泉、かせがもの云や、ことづてしよもの、かせは諸國

を、吹きまはる。松の葉、一本手、うきよぐみ、とてもたつなに、ねてご

西翁十百韻、獨吟、花ちらす、志賀の山風、何とせう。

諸國盆踊唱歌、和泉、かせがもの云や、ことづてしよもの、かせは諸國

を、吹きまはる。松の葉、一本手、うきよぐみ、とてもたつなに、ねてござれ、ねずともあすは、ねたとさんだんしよ。

○未來形、推量形を、名詞に續けるにわ、成ろう事なら、こうもしたい、あろう事か、あるまい事か、なども云うが、用いることわすくない。

○上一段、下一段、カ行變格、サ行變格活用の未來推量の末を、畿内邊から東でわ、口語に、大抵、「よう」と言うことわ、前に云つて置いた、かような言い方も、室町時代からある。

室町時代

狂言記、柿山伏、人と鳥と見違へやう物の様に、同、萩大名、今日、何方へぞ、出やうと存する。歌、云々、一首、詠うでも見やうか。同、烏帽子折、頼うだ人の國と名を申して、噺事で尋ねやうず。同、伯母酒、甘いをすく衆へは、甘いで進じやうず、辛いをすいて參る衆へは、辛いを進じやう。

同、惡坊、傘をかたげて、頭陀に出やうよ。同、靉猿、私の方より申上げやうと存する。同、伊勢物語、其儀ならば、今一度寐やう程に。同、連歌、毘沙門、梨、云々、此鋒で割らう、但し、錆びやうか。

【二一八】

動詞 未來形推量形 よう

續狂言記、入間川、向に、人が見ゆる、尋ねて見やう。

詠歌之大概、かたいとを、かなたこなたに、よりかけて、こなたも、かなたも、あはひで、何に、玉のをにして、かけてゐようぞ、との心也。

江戸時代

醒睡笑、三、坊主、いつも、鮎の名をかみそりをつけ、云々、彼僧、河をわたるに、云々、小者、うしろより、云々、かみそりがありくに、足をきり給ふな、といひければ、坊主、今は、八月なり、かみそりが、いかほどあると、さびようほどに、足はきれまい、とぞいへり。同、五、下臈一人、走り來り、さかばやしのものにより、たゞ一重きたるもめん帯を解き、手に持ち、うへにきやうか、したにきやうか、下にきやうか、上にきやうか、と、ひとりごとといひしが、わざくれ、したにきよや、といふまゝ、内に入り、酒にかへ、よきかんにあつらへ、云々、

古今夷曲集、八、年たけて、又きようとも、おもひきや、命なりけり、さやのお小袖。

後撰夷曲集、七、ゆびきりや、地獄の釜へ、ほつたりと、おちようといふ、二世

の契約。

諸國盆踊唱歌、越前、相生みよより、かいじやうみやれ、こびん撫でふ

後撰夷曲集七、ゆびきりや、地獄の釜へ、ほつたりとおちようといふ、二世

の契約。

諸國益踊唱歌、越前、相生みよより、かいじやうみやれ、こびん撫でふより、櫃なでふ。

○動詞の未來推量の形わ、次のように變わつたのである。

四段活用

書かむ

書かう(かこう)

書こう

上二段活用

落ちむ

落ちう

落ちよう

上一段活用

見む

みう

みよう

下二段活用

受けむ

受けう(うきよう)

受けよう

カ行變格活用

來む

こよう

こよう

サ行變格活用

爲む

せう(しよう)

しよう

【二一八】 動詞

未來形推量形の變遷

受身の助動詞の「打たれむ」「打たれよう」「可能の助動詞の「書かせむ」「書かせよう」「過去の助動詞の「指したらむ」「指したらよう」「指したらろう」なども同じである。

「む」の「う」となつた初にわ「書かう」「受けう」「せう」と發音して居たのが、後にいつか、「かこよう」「うきよう」「ししよう」となつたのである。「む」の子音のだまつて、母韻の「う」となるわ、通例であるから、「書かむ」の「書かう」となり、「落ちむ」「見む」「受けむ」「來む」「爲む」の「落ちう」「見う」「受けう」「來う」「爲う」となるわ、道理である。「受きゅう」「來う」「爲う」「わ」「落ちう」「見う」の口調から出來たものである。「し、落ちよう」「みよう」「わ」「受きよう」「しよう」の口調から出來たものである。「殊に、下二段活用の動詞わ、數が多いので、「受きよう」「失しよう」「捨ちよう」「兼によう」「止みよう」「隠りよう」「加よう」「添よう」「數よう」「代よう」「覺よう」「据よう」「など、末が「よう」となる口調が移つて（四段活用も、末わ、オの段の音となる）終に「落ちよう」「見よう」「受けよう」「しよう」となり、此口調で「來う」「が」「こよう」となり、「ししよう」の口調で、又、「きよう」となつたのである。「う、それであるから、「落ちやう」「受けやう」「など」と、「やう」と書くわ、道理のない事である。

○動詞の未來推量の形に、一つ變わつて居るのが、ある、それわ、愛知縣の名

古屋市邊で、「行かあず」「落ちいず」「見いず」「受けえず」「來うず」「爲えず」「打たれえず」

であるから、「落ちやう」「受けやう」「などと」「やう」と書くわ、道理のない事である。

○動詞の未來推量の形に、一つ變わつて居るのがある、それわ、愛知縣の名

古屋市邊で、「行かあず」「落ちいず」「見いず」「受けえず」「來うず」「爲えず」「打たれえず」「助けられえず」と云い、三河、靜岡縣、山梨縣の一部、長野縣の西南部でわ、これを約めて、「行かす」「落ちす」「見す」「受けす」「こす」「せず」「打たれす」「助けられす」と云う、是れわ、平安朝時代の初の竹取物語に「彼のもとの國より、むかへに、人々、まうで來むす」「土佐日記に、「此歌ぬし、又、まからずといひて立ちぬ」「ら」の下の「む」の省かれたので、打消とまぎれる、など、見え、其外、諸書に、「行かんす」「取らんす」ものを「可からんすれ」「あらんすらん」など見えて、是れわ、「來むとす」「まからむとす」「行かむとす」など云うべきを、約めて音便に濁らせたもので、それがまた、「來うず」「行かうずる」「あらうずる」など、なつて、名古屋邊で、「行かあず」「うけえず」「こうず」など云うわ、それから、また變わつたものである、然るに、それを、又約めて、「行かす」「うけす」など云うわ、打消と紛れで、未來、推量とわ、うらはらの意味に解せられる。

○又未來推量を、關東の處々、駿河の富士郡、伊豆、福島縣、宮城縣、山形縣、岩手縣、青森縣でわ、「書くべい」「押すべい」「起きべい」「落ちべい」「受けべい」「捨てべい」「見べい」「着べい」「こべい」「きべい」「すべい」「しべい」など、云う。

或わそれを略轉して「書くべ押すべ書くべ押すべ起きべ落ちべ起きんべ」
 落ちんべ着べ見んべ受けべ捨てんべこべきべくるべくんべこんべすべ
 しべすんべなどゝも云う。

受身可能の助動詞の「打たれべい」助けられべい、使役の助動詞の「書かせべ
 い」建てさせべいなども、右の例と同じである。又「見たんべい」など過去の
 助動詞にも「是れだんべい」「だんべ」「だべ」などゝ、指定の助動詞にもつかわれ
 る。

右の「べい」「わ」助動詞の「べし」「又わ」「べき」の音便であるが（子音がなくなつて、母
 韻ばかりとなつたのである）連體形の「べき」で、「そうしべい」もんでもない「お
 れも行くべい」かなどゝもつかわれるけれども、多くわ、終止形の「べし」の音
 便につかわれて居る。

平安朝時代

平安朝時代（室町時代）にも「べい」が見えるけれども、すべて、連體形の「べき」の
 音便で、指定の意味のものである。

源氏物語、朝顔、はしたなくもあ（る）べいかな。同、胡蝶、思へば、うらめし

か（る）べい事ぞかし。同、みをつくし、命こそ、かなひがたか（る）べいも
 のなめれ。

音便で、指定の意味のものである。

源氏物語、朝顔　はしたなくもあ(る)べいかな。同、胡蝶　思へば、うらめし

か(る)べい事ぞかし。同、みをつくし、命こそ、かなひがたか(る)べいものなめれ。

紫式部日記、おのが心を用ゐむことは、難か(る)べいわざを、

室町時代

史記抄、五、二〇　漢王ノ出ヅベイ方へ、サシムケテ置タゾ。同、十四、七二

我ガ職ノスベイ事ヲシテ、理ノアルベイ様ニ行ホドニ、治ハナニカアラウゾ。

孟子抄、四、三五　齊王、云々、王道ヲ行ヒツベイ人デ有ゾ、一タビ變ジタラバ、

仁ヲスベイ人ヂヤ、ト思ハレタゾ。同、八、七　悦ベキニ當テ悦、怒ベイニ怒ルハ、和ゾ。

江戸時代

江戸時代の「べい」は、終止形の「べし」の音便のもあるし、連體形の「べき」の音便のもあつて、指定、未來、推量の意味にもつかわれてある、いつ頃から用いて居たか、古い書物に見えぬから分らぬ、此終止形の「べい」は、東國に限るようでもあるが、次に擧げる九州の豊後、肥後の盆踊唱歌にも、寶永の京都の唄

【二一八】動詞　一種の未來形推量形　書くべい等

んくるべい、ツボンボへ。

ト養狂歌集、上、關東の雁や越路にかへるべい、さらばくのいとまごひ

して。

雑兵物語、上、鐵炮足輕小頭、若火もきえたんべいならば、替の火繩が澤山なほどに、云々、真甲をぶてば、なまくらものは、なべつるのやうになるべい。

松の葉、一葉手、そもじと、われとは、いちごちぎるべいぞ、よもさ、しらがにこえだのさくと、ちぎるべいぞ、よもさ、

京都の六孫王社の寶永の祭の唄に、寶永祭はみごとな事よ、誰も見にゆけ、ゆきなばいさ、ちと又此夜は、うさはらしの、上戸のおもひはこれなんべ。二話一言の十一に、中村かしくといふ京都の舞臺役者の美少年があつた、招く客が大勢つかへて、まだ客があるといへば、跡から來た客は、それなら待つべい、といふからして、自然と、松兵衛と名づけたとある。(延享の頃)

○尙、「べき、べし」の事わ、後の助動詞の末にも云う。

【一二二二】本書の「一人わ、刀で切りかゝる、云々」の例わ、過去の事を、目の前に見るように云うのである、「一昨年わ、水が出る、云々」の例わ、「一昨年わ、昨年わ」と云

【一二二二】動詞 現在の語を過去にも未來にも用いること

う過去の意味を持つて居る副詞句で、過去の事に聞えるのである、又、「二三年、不仕合がつづく、一昨日から、風が吹く、雨が昨日今日降つて居る」など云ふわ、作用の引續いて居る場合に云うのである。

○本書の「私わ、花の咲く頃に行く、などの例わ、未來の意味の副詞句に伴うから、「行く」が未來になるので、「来る三日に、演說會を開く、次の日曜日にわ、早く起きる、あの人は、明後日、出立します、などもそれである、そのみならず、これわ、慥にきめて云う心もあるので、これを、「行こう」「開こう」「來よう」「起きよう」「休もう」出立しまししょう」と云つてわ、不定の意味になるからでもある。

○駿河、山梨縣、長野縣、越後から東でわ、「書いて居る」「讀んで居る」「受けて居る」などを約めて、「書いてる」「讀んでる」「受けてる」「過去に、「書いてた」「讀んでた」と云て、進行現在に用いることがあつて、近畿邊でも、そう云う、それから西にわ、「書いて居る」「讀んで居る」「受けて居る」などを約めて、「書いてる」「讀んどる」「受けとる」と云う所があり、尙、近畿から西には、それを轉じて、「書いてちよる」「讀んぢよる」「受けちよる」など、も云い、又、「書き居る」「讀み居る」「受け居る」を轉じて、「書きよる」「讀みよる」「受けよる」など、も云う所があるが、どれも

用いぬがよかるう。

【一二五】 命令わ、その意味を云つて、終止形となる。

る「讀んぢよる」「受けちよる」など、も云い、又「書き居る」「讀み居る」「受け居る」を轉じて、「書きよる」「讀みよる」「受けよる」など、も云う所があるが、どれも

用いぬがよからう。

【一二五】 命令わ、その意味を云つて、終止形となる。

【一二六】 五段活用の動詞の命令の形わ、文語の四段活用のと、變わりはない。

【一二七】 上一段、下一段活用の動詞の命令を、駿河、山梨縣、長野縣、越後の一部から東でわ、口語に、「起きろ」「落ちろ」「着ろ」「見ろ」「受けろ」「捨てろ」と云う、尙、富山縣、三河、三重縣にも、そう云う處があり、九州の筑後、肥前、熊本縣、宮崎縣にも、「ろ」をませて云う處がある、其外わ、遠江、愛知縣、岐阜縣、富山縣、佐渡から、京都府、大阪府、和歌山縣、香川縣までは、大抵、「起きよ」「起きい」「落ちよ」「落ちい」「着よ」「着い」「見よ」「見い」「受けよ」「受けい」「捨てよ」「捨てい」をませてつかい、(京都大阪わ、「起きい」「落ちい」「着い」「見い」「受けえ」「捨てえ」それから西わ、九州まで、大抵わ、「い」である、しかし、上一段活用にわ、「い」の着かぬのものもあるから、今わ、「ろ」「よ」の二つに定めた。

「受けい」「捨てい」を、「受けえ」「捨てえ」と云う所が多い。

群馬縣の吾妻郡に、「着よ」「見よ」と云う處があり、武藏の兒玉郡、群馬縣の多野郡、佐波郡に、「着い」「見い」と云う處がある。

上一段活用の命令には、奈良縣、河内、丹波、宮崎縣に、「起き」「落ち」とばかり云う

【一二五】…【一二七】

動詞 上一段下一段活用の命令形

所があり、石川縣に、「起きよ」と云い、遠江、三河に、「起きよう」と云う所があり、富山縣に、「起ッきよ」起ッきゆ」落ッちよ」落ッちゆ」と云い、丹波、播磨に、「起きやあ」など云う所がある、又、奈良縣に、「起きろう」など云い、京都、大阪、尾張、播磨、長崎に、「起きんか」落ちんか」なども云い、「起きぬか」落ちぬか」の反語から、遷つたのである、秋田縣、山形縣の庄内、越後、佐賀縣、熊本縣、宮崎縣、鹿兒島縣に、「起きれ」落ちれ」など云う所がある。

河内に、「着き似に」とばかり云う所があり、富山縣に、「きよによと」ばかり云う所があり、三河に、「お着り」お見り」と云う所があり、名古屋市、播磨、長崎に、「着んか」見んか」と云い、青森縣、秋田縣、山形縣の庄内、越後、筑前、佐賀縣、大分縣、宮崎縣、鹿兒島縣に、「射れ」着れ」似れ」見れ」と云う所がある。

下一段活用の命令にわ、遠江、三河に、「受きよう」譽みよう」と云う所があり、(未來推量を、命令に用いることがあるから、變わつたものである、)尾張、美濃、富山縣、石川縣に、「受きよ」捨ちよ」譽みよ」と云う所があり、奈良縣、河内、丹波、熊本縣、鹿兒島縣に、「受け」任せ」譽め」など、ばかり云う所があり、筑前、大分縣、宮崎縣に、「受きい」捨ちい」任しい」兼にい」と云い、宮崎縣に、又、「受き」捨ち」任し」兼に」

譽み」又、「受きよ」兼によ」と云う所があり、奈良縣に、「受けろう」と云い、秋田縣、山

本縣鹿兒島縣に「受け」任せ「譽め」など、はかり云う所があり、筑前大分縣宮崎縣に「受きい」捨ちい「任しい」兼にい」と云い、宮崎縣に、又「受き」捨ち「任し」兼に

譽み「又」受きよ兼によ」と云う所があり、奈良縣に「受けろ」と云い、秋田縣、山形縣の庄内、越後、佐賀縣に「受けれ」譽めれ」と云い、尾張、播磨、長崎縣に「受けんか」捨てんか」と云う所がある。

【一二八】「くれる」と云う動詞わ、下一段活用であるから、その命令わ「くれろ」くれよ「くれい」であるが、醒睡笑、七「おのれが腰にあるめしを、われにおくれよ。」又、五段活用の命令のように、「茶をくれ」菓子をくれ」とばかりも云う。

「くれよ」わ、與へよの意味でなくて、「自分の爲にせよ」と求める意味にもつかつて、「貸してくれ」、「狂言記、萩大名、某をも、よい時分に、引合はいてくれさしめ。」など云う、是れわ、自分の爲めに貸せ」と云う心で、「貸してください」など、丁寧に云うも此心である。

○「よ」「い」「え」となつたもの、「へ」とあるも「え」である

室町時代

孟子抄、一、二七 穆公が、三良ニ、死ニ殉ヘイト遺言シタ。同、二、一六 妻子

モ、何カ只ハ有フゾ、跡デ過イ(過シ)テクレヘト云心。同、二、一七 チト、氣

ニチガヘバ、徒ラ物ヂヤ、截テステイ、ナド云ル、ゾ。

【一二八】 動詞 上一段下一段活用の命令形

狂言記、萩大名、太郎冠者、これへ出い。ゆるりと見物せう、床机をくれい。同、相合袴、さあ〜こ、へ足を入れい。同、拔殻、御酌、云々、さあ〜、受けい〜。同、悪坊、一飯の、云付けい。早う拵へい。同、かくすい、かの内々云ふたる高札をあげい。同、法師物ぐるひ、くどい事をいふて行かぬか、出て失せい。同、素襖落、今一つ飲うで、風味を覺へい。

江戸時代

醒睡笑、八、御所、風呂に御入ありつるを、蜂屋伯耆守、御垢にまるらんとて、ふかれけるやう、知行くれい〜と、云々、

【一二九】文語の力行變格活用の命令の「來よ」を、口語に「こい」と云うわ、東國一圓から、西は中國、四國、それから、九州の大半にまで及んで居る、しかし、又「こう」と云う所も、關東、奥羽の大半から、山梨縣、長野縣の一部、三河の豊橋、越後、富山縣、石川縣、福井縣、滋賀縣の蒲生郡、丹波、大阪府の一部、和歌山縣の和歌山市、新宮、岡山縣の都窪郡、廣島縣の御調郡、香川縣の一部、高知縣にある、そうして、「こい」を「こい」で、大阪わ「こい」を「こい」をませる、今わ「こい」の一つに定めた。

群馬縣の利根郡、長崎縣、沖繩縣に、「こよ」と云う所があり、青森縣、山形縣の庄

「こい」をませてつかつて居る所もあり其一つを「こい」につかつて居る所もある(京都わ「こい」で、大阪わ「こい」こう)をませる、今わ「こい」の一つに定めた。

群馬縣の利根郡、長崎縣、沖繩縣に「こよ」と云う所があり、青森縣、山形縣の庄内、福井縣に「こ」とばかり云う所がある。

茨城縣に「きろ」と云う所があり、秋田縣の龜田でわ「ころ」と云い、山形縣の庄内、越後、富山縣、岡山縣の川上郡、山口縣の大島郡に「こえ」と云い、奈良縣に「きよ」と云い、高知縣、豊前に「きい」と云い、大分縣に「きいくい」と云い、長崎縣、筑後、熊本縣に「けえ」と云い、佐賀縣に「けえ又わ「け」と云い、宮崎縣に「きよききい」と云い、鹿兒島縣に「けいけ」と云う所がある。

○萬葉集、七に「白玉寄せ來、沖つ白浪」。同、七に「雨ぞ降るてふ、歸り來吾が兄」。古今集、二十に「するさへ寄りこ、しのびく」に。榮華物語、月の宴に「尋ねて訪ひこ、きなばかへさじ」。など、古くわ、命令に「こ」とばかり言つて居たが、中世から「よ」を添えて云うようになつたのである。

○「こよ」の「こい」となつたもの、「ひ」とあるも、「い」である。

室町時代

史記抄、十一、二八　コチヘコヒト云フ。同、十一、二〇五　與期旦日、日ノ出トハ、明日、トツク、日ノ出ル時分ニコヒト云フ心ゾ。

孟子抄、十四、一三 哀レ、馮婦ガコイカシト思タレバ、折節、ソコヘ來タ處デ、
迎テ取テ給ハレ、ト云ゾ。

狂言記、萩大名、追付て行かう、さあ、こい、こい。同、相合袴、やい、冠者
行て呼びましてこいや。

江戸時代

おあん物語、親父、ひそかに天守へまいられて、此方へ來いとて、母人我等
をも、つれられて、

諸國盆踊唱歌、長門、こいとゆたとして、ゆかれるみちか、みちは四十より、夜
はいちや。

淋敷座之慰、のほ、んぶし、でつちもてこい、すり鉢笠を、こ、さかぶさろ、
獄門へ。

狂歌鳩杖集、大阪へ、やがてこいと、の地黄煎、あまいことばに、ちよいとの
る船。

西鶴置土産、五、都もさびし朝腹の献立、前々の銀もつてこいと申ました
物か、

【一三〇】文語のサ行變格活用の命令の「爲よ」を、口語に「しろ」と云うわ、静岡縣、

西鶴置土産五番もさひし朝服の南立 前々の鏡もつてこいと申ました
物か、

【一三〇】 文語のサ行變格活用の命令の「爲よ」を、口語に「しろ」と云うわ、静岡縣、山梨縣、長野縣、越後から東、一圓で、尙、三河、三重縣、富山縣、佐賀縣、熊本縣、宮崎縣にも、そう云う所がある、又、富山縣、石川縣、福井縣、滋賀縣、三重縣から西わ、九州まで、大抵「せい」と云い、長野縣、遠江、愛知縣、岐阜縣にわ「しよ」又わ「せよ」と云う所があり、そうして、此「せいしよ」をませせてつかつて居る所があり、其中の一つをつかつて居る所がある、(京都、大阪は「せえ」である)今は「しろせよ」の二つに決めた。

東京で「何しろ、安心わ出來ない」など云うを「何せよ」と云うこともある、是れわ、それにまかせる意味である。

山形縣の飽海郡に「せい」と云う所がある。

「しろせよ」をませせてつかつて居る所が、武藏の入間郡にあり、「しろしい」をませるのが、群馬縣の多野郡にあり、「しろしよ」をませるのが、武藏の入間郡、群馬縣の邑樂郡、山形縣の東置賜郡にあり、「しろせい」をませるのが、武藏の浦和、川越、兒玉郡、神奈川縣、群馬縣の佐波郡、岩手縣、青森縣、越後にあり、「しろしよ」をませるのが、静岡縣、長野縣にあり、「せいせよしよ」をませるのが、三

【一三〇】

動詞

サ行變格活用の命令形

一三七

河、岐阜縣、富山縣、福井縣、奈良縣、德島縣、香川縣、高知縣、宮崎縣にあり、「せいしよ」をませるのが、石川縣、和歌山市、大阪府の豊能郡、廣島縣の御調郡にあり、「せいせよ」をませるのが、滋賀縣、攝津、和泉、和歌山縣、島根縣、愛媛縣の宇和島、宮崎縣にあり、「せよしよ」をませるのが、遠江、尾張にあり、「しよ」と云うわ、佐渡、筑前の北部、豊前の中部で、右の外わ、多く「せい」である。

右の「せい」を「せえ」と云う所も多い。

「せ」とばかり云う所が、青森縣、山形縣の庄内、富山縣の下新川郡、滋賀縣の膳所、熊本縣、鹿兒島縣にあり、「しえ」と云う所が、山形縣の庄内にあり、「しよ」と云う所が、静岡縣、三河、岐阜縣、福井縣、石川縣、富山縣の下新川郡にあり、「しよ」（未來、推量、と同じである）と云う所が、尾張の師崎、富山縣の下新川郡、廣島縣の御調郡にあり、「せえよ」と云う所が、丹波、大阪府の西成郡、山口縣にあり、「すろ」と云う所が、群馬縣の邑樂郡、山形縣の北村山郡、岩手縣にあり、「せろ」と云うが、長野縣の一部、三河の豊橋、筑後、熊本縣にあり、「しれ」と云うが、越後にあり、「せれ」と云うが、福岡市の近傍にあり、「せんか」と云うが、名古屋市にあり、「し」とばかり云うが、宮崎縣にあり、「しい」と云うが、滋賀縣の蒲生郡、高知縣、大分

縣、宮崎縣にある。

○萬葉集、十に、「しだり柳の、かつら爲（せよ）吾妹」。同、十二に、「事はかり、よく爲（せ

り「せれ」と云うが、福岡市の近傍にあり「せんか」と云うが、名古屋市にあり「し」とばかり云うが、宮崎縣にあり「しい」と云うが、滋賀縣の蒲生郡、高知縣、大分

縣、宮崎縣にある。

○萬葉集、十に、「しだり柳の、かつら爲(せよ)吾妹」。同、十二に、「事はかり、よく爲(せよ)吾が兄子、あへる時だに。」古今集、七に、「とゞめおきては、思出にせよ。」など、ある。

○「せよ」の「せい」となつたもの、

室町時代

孟子抄、一、一九 速時ニ出來タゾ、ハヤクセイイトハ云レヌゾ。同、一、二七

穆公ノ死サマニ、三人ノ良人ニ、供セイイト云タ事ハアルマイゾ。同、四、八
上ヨリ教ヲ下シテ、トセイカウセイイト云テ、

狂言記、柿山伏、汝が宿へ連れて行て、看病をせい。同、相合袴 盃、云々、聲殿に進せい。同、吟聲 度々、聲入をせいとあつて、節々の使が立ちまする。

伊曾保物語、あれが取つて喰うたものぢや、それ打擲せい。

江戸時代

醒睡笑、八、御所、風呂、云々、蜂屋をとらへ、云々、ふかせ給ふや、奉公せい

【二三〇】

動詞 サ行變格活用の命令形

くく

○命令に、「起きよ受けよ來よ爲よなど、よ」と云うわ、文語の形、そのまゝにつか
 つて居るので、「いと云うわ、よ」の音の變わつたものである。「ろ」と云うのわ、東
 國の一つの言葉づかいである、(九州の肥前、筑後、熊本縣でも「ろ」と云うわ、東國
 の武家の移つてから、傳えたものである、)此「ろ」わ、今、廣く東國に行われて居
 るが、少し、下品に聞える言葉であつて、「歸る、來る」と云う動作を敬つて云うに
 「歸られる」「來られる」と云う、其命令に、「歸られよ」「來られい」などゝわ云われるが
 「歸られる」「來られる」とわ云われないのでも知られる。
 東國の命令に、「ろ」をつかつて居るのわ、古いことで、萬葉集の東國の歌などに
 見える。

萬葉集、十四、

高麗錦、紐解きささけて、寢るが上に、何世呂(爲ろ)とかも、あやに愛憐しき。

同、十四、

白雲の、絶えにし妹を、何西呂(爲ろ)と、心にのりて、許多悲しけ。

同、二十、

草枕、旅のまる寢の、紐絶えば、我が手と都氣呂(付けろ)これの波流母志。

(針持)

白雲の、絶えにし妹を、何西呂(爲ろ)と、心にのりて、許多悲しけ。
同、二十、

草枕、旅のまる寢の、紐絶えば、我が手と都氣呂(付けろ)これの波流母志。

(針持)

東遊歌、一歌、

はれな、手を止々乃部呂(調へろ)な、歌調へな。

風俗歌、駿河、之太之浦、

之多の浦に、朝漕ぐ小舟、佐志與勢呂(差寄せろ)我さへ乗りてな、之太の浦
見むや。

右、古くわ「せ」つけ「と」のへ「よせ」とばかりで、即ち命令であつて「ろ」わ、唯、附けた
ものである。「ろ」わ、古代の一種の助詞で、動詞に限らず、萬葉集、一に「乏吉呂」。同、三
に「悲呂」同、十六に「不念呂」其外「夫ろ」「嶺ろ」「尾ろ」など、形容詞、助動詞、名詞にも、多
く附けて用いてある、それが、いつか、外の語にわ附けることがすたれて、東國
の動詞の命令にばかりわ、必ず附けることゝなつたものである。

弘安の頃の塵袋と云う書の十、詞字にも、坂東ノ人ノコトバノスエニ、ロノ字
ヲツクル事アリ、ナニセロ、カセロト云フ、とあり、天文元年の塵添壺囊抄、一、宿
勿事にも、此條を引いてある、右の萬葉集の歌のサ行變格活用の命令にわ、其

【二三〇】 動詞 命令形の末の「ろ」

第一活用の「せ」に、「ろ」を付けて、「せろ」とある、是れわ「せよ」の例に見て、正當である、塵袋にも「せろ」とあるから、鎌倉時代までわ、そう云つて居たものである、今の世に、「しろ」と云うようになつたのわ、いつ頃からの事か、何分、中昔の東國の言葉を書いた書物が無いから分らぬ。

室町時代

天正日記、天正十八年、六月廿六日、するがのもの、江戸へ御こし候はゞ、めしつれくれると申て、七人參る。

江戸時代

恨之介、上、(慶長中) 夢の浮世をぬめろ、やれ、あそべや狂へ、皆人と、世にある貌はうらやまし。

ト養狂歌集、下、伊勢おどりのはやりければ、我君を、こゝで松崎、いせおどり、そこらでしめろ、まかせ腹帯。

後撰夷曲集、六、蕨の宿にて馬子どももの喧嘩するをみて、かれが心を、すなはち、奴子詞にてよみ侍りし、手を出せろ、折てくれべい、ばか面め、どこさ、蕨の、じゆくの馬かた。同、十、修行門のこゝろを、當世詞にてよめる、宣應、

(熊本) 法の舟、ありか他力よ、身はすんと、南無阿彌陀佛に、任せておける。今宮心中、(近松作) 是れ奴、腸の出る程、こいつ踏め、任せておけると土足に

後撰夷曲集六、蕨の宿にて馬子どもの喧嘩するをみて、かれが心をすなはち、奴子やつこ詞にてよみ侍りし、手を出せる、折てくれべい、ばか面め、どこさ、蕨の、しゆくの馬かた。同、十、修行門のこゝろを、當世詞にてよめる、宣應、

(熊本) 法の舟、ありか他力よ、身はすんと、南無阿彌陀佛に、任せておける。今宮心中(近松作) 是れ奴、腸の出る程、こいつ踏め、任せておけると土足にかけ、

「置け」と云う四段活用の命令にも、「ろ」を附けてあるので、「ろ」の「よ」や「と同じものであることが知られる、しかし、今わ「置ける」讀める」などとわつかわぬ、又、後撰夷曲集八、梅と牛とのかたかける繪に、「牛は是、二月の雪か、梅花をば、折て頭に、させいひやうせい」など、是れも「指せ」と云う四段活用の命令に、「い」を附けたのである。

雑兵物語上、鎗擔小頭、腰骨をつよくして、おくれないやうに、覺悟をし。同、上、數鎗擔、鍵のさやのちいさいをば、具足の胸板へいれる。同、上、馬取、右の四緒しよ手に、小鐵炮請筒ともに引付る、跡の四方手左右には、大豆袋をひつさげろ。とくと氣を引しめろ。とつくと氣をしづめろ。

○「お讀みな」お起きな「お受けな」お讀み「お起き」お受け「讀みな」起きな「受けな」など云う命令の言い方もあるが、それわ、後の敬讓の助動詞の命令の言い方の處(二九八)で云う。

○自分で、自分に言いつける言い方がある。

笑つてやれ　え、捨て、置け

命令を、禁止につかうことがある。

馬鹿を云え　嘘をつけ

過去のことばを、命令につかうことがある。

ちよつと待つた　退いたく

未来のことばを、命令にもつかう、但し、多くわ、叱り付ける時などである。

控えて居ろう　出て失しよう

室町時代の狂言記、ひめ糊に「退り居らう、おのれがやうなる鈍な奴は、云々、かさねて、折檻の加やうする、そこ立つて失せう、同、抜殻に「門の番なりとも、さして下されませう」同、鹿狩に「まづ御前、先へござりませう」同、墨塗に「あれへいて見う、又、末の「う」を畧したのがある、狂言記の二千石に「夫へ出て聞き居る。同、末廣がりに、「夫を求めて來るといふことがあるものか、あなたへうしよ。」江戸時代の淋敷座の慰、のほ、んぶしに、「でつちもてこい、すり鉢笠を、こゝさかぶさる、獄門へ。」

【一三一】(一六七)(三〇三)(三〇五)(五五四)にも「な」がある。

【一三四】敬意を含んで居る動詞の中で「おめしあそばす」おあがりなさる「な

しよ。江戸時代の淋敷座の慰のほゝんぶしに「でつちもてこい、すり鉢笠を、こゝさかぶさる、獄門へ。」

【一三一】(一六七)(三〇三)(三〇五)(五五四)にも「な」がある。

【一三四】敬意を含んで居る動詞の中で、「おめしあそばす」「おあがりなさる」などの外わ、「お」を冠らせることわない、又「あがる」「よりわめしあがる」「なさる」よりわ「あそばす」の方が、敬う心が深い。

○古事記、仲哀の卷、天皇、云々、押退御琴不控、云々、建内宿禰大臣曰、恐、天皇猶阿蘇婆勢其大御琴。

○平安朝時代

宇津保物語、國讓、日頃は、ひるは、御文あそばし、よるは、御手ならひ、あくまでせさせ給ふ。

源氏物語、明石、猶あそばさんやとて、秋風樂に搔合はせ、さうかし給へる、鎌倉時代

新千載集、雜、還幸の時、かの障子に、御製あそばしつけられて、室町時代

幸若、烏帽子折、その笛、一手あそばせ。「夜とゝもに、笛をあそばし、一の的、ちやうと遊ばし、二の的、はたと遊ばす。」

【一三一】【一三四】敬意を含んで居る動詞

狂言記、吟聲、 聲殿に、一つ、音曲をあそばせと申せ。同、萩大名、 いづれも
の、御腰掛けられて、あの萩の名につけて、短冊を掛けさつしやる、殿様に
も、遊ばしませい。

○鎌倉時代

宇治拾遺物語七、 水飯を、やくとめすとも、此定にめさば、更に、御ふとり直
るべきにあらず。

室町時代

狂言記、烏帽子折、 先づ、下には、白小袖を召しませう。「熨斗目を召さつし
やれたが、ようござりませう。同、吟聲、 こなたは、聲入をめさるれば、な
されば、分別までが上つた。

江戸時代

正章千句、一、 うつぶいて、どうぞめされよ、(乗られよ)船遊。「(雑兵物語、
上、鐵炮足輕小頭に、あだ玉をはじき捨てないやうには、なしめされふ。
などわ、助動詞のようである)

○室町時代

狂言記、拔殻、 いや、御酌、慮外にござりまする、これへ下されませう。同宗
論、 僧、云々、芋、云々、ずるきを生ず、云々、芥子で、辛々とあへ、檀方がたて下

などわ、助動詞のようである。

○室町時代

狂言記、拔殻、いや、御酌、慮外にござりまする、これへ下されませう。同宗論、僧、云々、芋、云々、ずるきを生ず、云々、芥子で、辛々とあへ、檀方がたで下さるゝ時は、尊うて、ありがたうて、涙がこぼるゝ。事足らぬ御方へ参れば、焼鹽一菜で下さるゝ。

○室町時代

孟子抄、一、二五 カウ思召テコソヲシヤツツラウト云レタ處デ、王ノマヅ、サウヂヤト云レタ。是ガ、王者タルニカナフト、孟子ノヲシヤルハ、何トシタ事ゾ。

狂言記、吟賀、其時、おしやらうには、鼻内にもらるゝか、賀が参りて候と、それゝ申せ、太郎冠者、ふやらの、ふやらの、ふんとおしやつたがよい。同、拔殻、はて、ひよんな事をおしやれます。同、賀貫、さうおつしやるは、合點でござる。こゝへは來ぬとおしやれい。戻すまいとおしやる。

江戸時代

古今夷曲集、一、名所花、いつとても、よう來たとだに、おしやらぬは、をしほのはなで、人やあしらふ。同、十、題しらず、聖徳の、後世を願へと、おしや

【一三四】 敬意を含んで居る動詞

りしを、守屋はあべと、めをひろげたり。

後撰夷曲集、九、卑下慢が、餓鬼とおしやれど、力ありて、こゝろ言の葉、ようえびす歌。

鹿の卷筆、二、筆屋のじゆりやう、さてく、旦那は、おろかな事をおつしやる。

○敬意を含んで居る動詞に、「およる、寝る、夜をはたらかせた語、おひんなる、眠覚めて起きる、晝になる」の音便、「御寝なる、寝る、それを約めて、げしなる、ごろうじる、御覽する」の轉、「ごろんじやる、御覽せらる」の轉、「見える、来る」など、云うのもあるが、多く用いられない、鎌倉時代の著聞集五ノ十四に「月をも御覽せでおよるなれば、此御文まるらするにおよばず、室町時代の閑吟集に、「をとせいで、およれ、からすは、月に鳴くぞ。」狂言記、靱猿、船の中には、何とおよるぞ、苦を敷寐の梶まくら。」史記抄、十二、二七に、「透留モアルマイ、ヤガテミエウゾ。」狂言記、拔殻に、「是れ、ごろんじやれませい、鬼の拔殻でござる。」それ御らうせられい。」江戸時代の醒睡笑、五に、「振舞過ぎて、碁始まれり、僧の俗にむかひて、いざく、よつて、ごろうじらう、と申さる。」（命令に、「ごろんじやい、とも云う」）

○「おいでなさる」来る、行く、居る、「おやすみあそばす」寝る、「おかくれなさる」死ぬ、「おひろいあそばす」歩く、「おせられる」言う、「おを冠らせぬ」なども、敬意を含ん

れり、僧の俗にむかひて、いさく、よつて、ごろうじらうと申さるゝ。(命令に「ごろんじやい、とも云う」)

○「おいでなさる」来る、行く、居る、「おやすみあそばす」寝る、「おかくれなさる」死ぬ、「おひろいあそばす」歩く、「おゝせられる」言う、「お」を冠らせぬなども、敬意を含んで居る動詞であるが、かように、熟語として用いるばかりで、「おいでる」と云う處もある、「かくれる」ひろう「おゝせる」とわつかわれぬ、「やすむ」わ「寐る」を丁寧^{ていねい}に云う言葉となる、但し、「おいで」おやすみ「此二語わ、命令にも用いる」、「おかくれ」おひろひ「おゝせ」と、名詞として用いることわある。

○「御召しになる」おあがりになる「おでになる」お読みになる「御覧になる」御詮鑿^{ごせんさく}になる「などゝ」になる「を」付けて、敬意を含んだ意味に用いる言葉がある、但し、命令にわ用いぬ。

【一三六】「なさる」にわ、受身、可能、敬讓の助動詞の「れる」が、其第一活用形に附いて、「なさられる」となるはずであるが、そうわつかわれな^いで、「なされる」となつて、可能の意味にばかり用いられる、是れわ、可能の「勝たれる」讀まれる「が」勝てる「讀める」となるのと同じである。

「なさりかねる」く「ださりすぎる」など用いるわ、連用形である。

第二活用形に、過去の助動詞の「た」を附ける時、「なさつた」く「ださつた」となるわ、

【一三六】 敬意を含んで居る動詞

常のラ行五段活用の動詞と同じである、然るに、これを「なすつた」「なすつて」「
だすつた」「だすつて」とも云うことがあるが、用いぬがよい。

○「なさる」「くださる」「わ、元と、爲す」「下す」と云う四段活用の動詞の第一活用の「な
さ」「くださ」「に、敬讓の助動詞の「る」「が附いて、それが「れる」と變わつて、「なされる」
くだされる」「下一段活用」となつたものが、轉じて五段活用となつたものである
る、それであるから、助動詞の「ますが、第二活用形に附いて、「なさります」「くださ
ります」となるわ、四段活用の規則通りであるが、同じ第二活用形に附くはず
である希望の助動詞の「たい」「が」「なさり」「たい」「くださり」「たい」「當人が望む心」とも、
「なされたい」「くだされたい」「外から望む心」とも用いられるのわ、下二段の姿の、
残つて居るのである、敬讓の助動詞の「ます」「も、元わ、なされ」「ます」「くだされ」「ます」
と附き、過去の助動詞の「た」「も、なされ」「た」「くだされ」「た」と附いたもので、其外「御酒
くだされ」「がある」「など云うのわ、名詞となるので、ありがたいなされ」「方」「數々の
くだされ」「物」など云うわ、名詞となつたものと、名詞との熟語で、未來、推量に、「さ
うなされう」「これをくだされう」「など、用いてあるのも、皆、下二段活用の姿で
ある、(下二段に用いてあるわ、(一三四)の狂言記に見える、)

【一三七】「いらつしやる」「の、來る」「の意味のものわ、入らせられる」「の約まつたも
の、「行く」の意味となるのわ、先方え入る意に用いるのであろう、)「居る」の意味の

うなされう「これをくだされう」など、用いてあるのも、皆下二段活用の姿である、(下二段に用いてあるわ、(一三四)の狂言記に見える)

【一三七】「いらつしやる」の「来る」の意味のものわ、入らせられる「の約まつたもの、(行く)の意味となるのわ、先方え入る意に用いるのであるう、居る」の意味のものわ、居らせられる「の約まつたもので、それが、五段活用に變わつたのである、一つの語に、来る」行く居る」の三つの意味のあるわ、紛れやすいが、前後の言葉で、解す外に、しかたがない、(おいでなさる「おいでになる」にも、同じ三つの意味がある、畿内あたりでわ、來やはる「行きやはる」居やはる」と云いわける)、「おつしやる」も、仰せられる「の約まつて、五段活用となつたものである。

右の二語の第一活用に、受身、可能の助動詞の「れる」を附けて、「いらつしやられる」「おつしやられる」とも用いるが、多くわ、可能の意味で、「いらつしやれる」「おつしやれる」と用いる、是れわ、可能の「勝たれる」が「勝てる」となり、「言われる」が「言える」となる、と同じである。

「いらつしやりかねる」「おつしやりにくい」など云うわ、連用形である。

「いらつしやった」「をいらしつた」「いらしつて」など、も云うが、用いぬがよい。

【一三八】【一三九】 丁寧に云う意味の動詞に、又「おいたゞきもうします」「おあげなさる」など、「お」を冠らせることがあるが、「もうす」「もうしあげる」「いたす」つ

【一三七】……【一三九】 丁寧に云う意味の動詞

かまつる「うけたまわる」にわ「お」を冠らせることわなない。

○「もうす」よりわ「もうしあげる」「いたす」よりわ「つかまつる」「あげる」よりわ「さしあげる」の方が、丁寧に云う意味が深い。

平安朝時代、續日本紀、三十、「黒酒白酒の御酒、食倍るらぎ」、催馬樂、酒飲「酒をたうべて、たべゑうて」、室町時代、狂言記、伯母酒「酒、云々、ちと休んでたべう」、同、烏帽子折「正月元日、出仕にあがらうと思ふ。」伊曾保物語「それをばエソポこそ、盗んでたべてござれ。」江戸時代、昨日は今日の物語「松だけなども、むざとたぶるは、いらざる事ぢや。」

鎌倉時代、吾妻鏡、元暦二年、四月二十一日、「相構可決勝負由、存思之處、士卒之所存、皆如踏薄氷。」室町時代、幸若、和田酒盛「よしもりがぞんじには、ばつくんちがふて存ずる」。狂言記、烏帽子折「藤六、某、烏帽子紙の結ひやうを存じて居りまする。」同、ひめ糊「物の本の内にあるかと存ずる。」江戸時代、古今夷曲集、九、「自らが、え持ちませねば、たべたいと存ずるをりに、おきもいりかや。」(煎櫃を贈られた返歌)

○敬意を含んで居る動詞の「くださる」「やる」を、丁寧に云う意味で、「食う」「飲む」に

用いることがある。

りかや「煎櫃を贈らぬた返哥」
○敬意を含んで居る動詞の「くださる」「やる」を、丁寧にに云う意味で、「食う」「飲む」に

用いることがある。

「寐る」を、丁寧に、「ふせる」(五段活用)と云うことがある、鎌倉時代の砂石集、三に、「此子、云々、父トハ都テ寢候ハデ、母トノミフセリ候。」室町時代の狂言記、鞍馬参に、「伏せりたさのまゝであらう、免す、いて休め。」

「参る」を音讀して、「明日、こちらから参まゐります」など云うも、丁寧にに云うのである。

【一四〇】「ござる」と云う動詞は、「おます」に當てた文字の「御座ござ」を音讀したのに、「ある」が附いて約つて、「ござる」となつて、ラ行五段活用となつたものであるが、(今でも、畿内でわ、「ござる」を、「おます」と言つて居る)此語にわ、「居る」「來る」「行く」あるの四つの意味があつて、いろ／＼に用いられる。

先、打消の助動詞の「ぬ」を附けて、「ござらぬ」と云うは、四つの意味に通うけれども、「ない」を附けて、「ござらない」と云うと、「居る」「來る」の打消の意味にばかりなつて、「行く」あるの打消にわ用いない、又、受身、可能、敬讓の助動詞の「れる」を附けて、「ござられる」と云う時も、「來る」「居る」の可能の意味ばかりで、「行く」有るの意味とわならない、又、敬讓の助動詞の「ます」を附けて、「ござります」と云う時も、「有る」の意味ばかりで、「居る」「來る」「行く」の意味にわ用いられない、「ござり」は、中止形に用

いない、又、「ます」を略して、「さようでござい」(ある)など、終止形に用いる事がある。又、過去の助動詞の「た」を附け、助詞の「ば」を附けて、「ござつた」(ござれば)と云うわ、四つの意味に通い、又、命令に、「ござれ」と云う時わ、「居れ」「來い」「行け」の意味で、「あれ」の意味にわ用いない、稀に、「水でござれ、茶でござれ、飲む」など、云う時わ、「あれ」の意味になるけれども、丁寧に云う意味なくなる、又、未來、推量に、「ござろう」と云う時は、四つの意味に通う、かように、活用形の意味が、分れ／＼になつて、ひどく入り組んで居る上に、今わ、「ござる」とばかりでわ、餘り用いもしないから、此語わ用いないこと、として、「ます」を附けて、「ござります」「又わ「ございます」と熟語になつたものを、「ある」の意味一つのものとして、敬語に用いること、した。

室町時代

狂言記、宗論、こなたは、都はどこにござる(居る)ぞ。同道いたさうと、御約束いたいてござる(ある)が、云々、こなたは、先へござれ。(行け)同、萩大名、御亭主ござる(居る)か。冠者殿何としてござつた(來た)ぞ。其事でござる。(ある)同、鹿狩、さあ／＼、ござれ／＼、(來い／＼)まづ、御前、先へござりませう、(行け)同、烏帽子折、若殿様、御出仕など、ござらう(あろう)時に御役

に立たうと存じ、同、吟賀、さやうにござれば、(あれば)太郎冠者を呼出

し、申付けうと存ずる。いづものやうに、見苦くしてござらう(居らう)とも、

う、(行け) 同、鳥帽子折、若殿様、御出仕など、ござらう(あろう)時に御役

に立たうと存じ、同、吟賀、さやうにござれば(あれば)太郎冠者を呼出し、申付けうと存ずる。いつものやうに見苦くしてござらず(居らず)とも、上臈衆も、身だしなみを、肝要でおじやる。

江戸時代

後撰夷曲集、一元日、明けぬれば、ござる(来る)物とは、知りながら、猶めでたきは、けふの年徳。「福の神、たづねて、ござれ(来い)我宿は、春早々に、松たてる門。同、一、よし野にて、ふむなく、散りぬる花を、三吉野の、藏王の足も、あげて、ござれ(あれ)ば。同、九、題しらず、何事も、見ざるきかざる、いはざると、よござる(ある)とさる、人の申しき。

○「ござります」が崩れて、「ござんす」となることがあつて、「ござんせぬ」「ござんした」「ござんす」「ござんしよう」「ござんせ」と活用し、「ござんすれば」「がなひ」「専ら、ある」の意味に用いられ、唯、「ござんした」を「来た」の意味にも用い、「ござります」にわ、命令の「ござりませ」を用いないが、これにわ、命令に、「ござんせ」があつて、「来い」の意味にばかり用いられる、此語も、かように、活用形の意味が、まぢまぢちである上に、今でわ、婦人に限る語のようになつた。

【一四〇】 丁寧に云う意味の動詞

江戸時代

家

柳亭記、下、百林説林、續下、二、薬師通夜物語寛永廿一年印本に、この頃は、又、よござり

ませうなう、といふ事は、やりければ、頓て、目出度よき事のあるべし、とい

ふ事あり、又、百物語正保年間作歌、大小二枚あり、下の卷に、世の中の時勢詞はやりを、俳諧にした

るとて、百韻、人の見せける、其中に、をかしき句あり、とてかたるを聞けば、

おしるには、よござんせう「あろう山椒」の、からみにて、あへ物によき、あの

さまのうど。

松の葉、二、長歌、ふじまうで、ひやうたんを腰につけて、みづあそびもござ

んす。（ある）英一蝶の投節、どふ思うて、けふはござんした、（来た）そふい

ふことをきゝに、

「ござります」が「ござんす」となり、又、「ごあんす」「ごんす」「ごす」「げす」など、いろ

／＼に崩れかわることがあつて、「で」と合つて、「でごんす」「でんす」「です」な

どゝもなる、そのくわしい事わ、後の指定の助動詞の處で云う。

【一四一】「御目にかゝる」「會う」「御目にかける」「御覽に入れる」「見せる」「御用立てる」

「貸す」「まかりでる」「出る」「御許しを蒙る」「御免をこうむる」「許される」など、句で丁寧

に云う語もある、又、「たてまつる」「やる」と云う語もあつて、助動詞のよ用に、「待ち

(貸す)「まかりでる」(出る)「御許しを蒙る」(御免をこうむる)「許される」など、句で丁寧

に云う語もある、又「たてまつる」(やる)と云う語もあつて、助動詞のように、「待ちたてまつる」など、も云うが、多くわ用いられない。

【一四三】【一四四】 丁寧に云う意味の動詞わ、他人の動作にかけて、「はつきりとまうせ」さよういたせ」など、命令に用いるけれども、自分の動作についてわ、命令に用いることわない、「ござりますわ」「ござりませ」と、命令にわつかわない、尙、其外、命令の事、又、其用例わ、(一三四)以下の諸項に云つてある。

命令に、口語で、「なされ」くだされ」いらつしやれ」おつしやれ」と言わぬこともない、「なさい」ください」いらつしやい」おつしやい」の「いは」「れ」「え」となつて、又、「いと變わつたのか、又わ、なさい」まし」ください」いらつしやい」おつしやい」ましの「まし」を略したものが、分らぬ。(敬讓の助動詞の「ます」の命令を見よ) 助詞の「な」「よ」を附けて、命令の形にする事もある、それも「い」に附く。

なさい	な	ください	いらつしやいな	おつしやいな
なさい	い	ください	いらつしやい	おつしやい
なさい	よ	ください	いらつしやい	おつしやい

又「見て頂戴」(丁寧)になど、敬語の命令につかう事がある、(多くわ、東京の婦人に用いられる)又「見て御覽」(敬つて)など、も云う、是等わ、見ていたゞく「見て試